《第３回全体学習》

同和問題（道徳）学習指導案

1993年６月15日　５校時

３年Ｆ組　指導者　吉成　正士

１．主　　題　　真実を求め、ともに怒りを

２．主題設定の理由

今年度も３４名の生徒を受け持ち、１年間のスタートをきることができた。その最初の道徳の時間に今年の春、卒業していった生徒からもらった手紙を読んだ。

※

‥‥入学式が終わって生徒が教室に入ったとき、同和教育担当の先生が保護者に「うちは、同和教育をします」って言ったそうです。お母さんからそれを聞いて、なんかうれしかった。その先生は、前に養護学校に勤務していて、そのとき「なんで養護学校の先生なんかしなきゃいけないんだ‥‥」って思っていたそうです。でも、自分のお姉さんの子どもが障害者として生まれてきて、そのときに自分の差別意識に気づいたそうです。このことも、その先生は保護者に言ったそうです。入学式の日に、４００人という親の前で自分のことが言える先生はなかなかいないと思います。そんな先生がいる学校だから、私は中学のときみたいに頑張れる気がします。高校では同和問題学習をする機会はあまりないと思っていました。でも、ここは積極的にやっているみたいだし、自分もそういう機会があって良かったと思う。正直、中学校みたいに熱心に勉強することなんかないと思っていたから、いつ自分が差別心に負けてしまうか不安でした。数少ない機会だろうけど、積極的に取り組もうと思っています。先生も負けないようがんばってください。

※

といった内容である。今の学級の現状は、とてもここまでは育っていない。まだ新学期が始まって間もないというのもあるのだろうが‥‥。学級というもの自体、様々な出来事（峠）にぶち当たってそれを解決し、はじめて成長していくものだと思う。そんな教育活動の中核に、やはり、同和教育を据えていきたい。いろんな命題に対して、困り、悩み、考え、ときには、人としての道からはずれ、学級自体がぶち壊れてしまうこともあるだろうが、それでも子ども達の人として持って生まれた純粋な心を信じて、見守っていきたい。その中で、今は埋もれてしまっている熱い鼓動を呼び覚ましていきたい。そう思わせてくれたのも、先にあげた手紙を聞いた子どもの感想があるからである。

※

‥‥私は、○○高校が同和問題学習をしているということは全然知りませんでした。高校で同和問題学習をしているところはほんのわずかかもしれないし、もしかしたらどこの高校もやっていないのかと思っていました。私は、○○高校が同和問題学習をしていると聞いて、はっきりいってうれしかったです。高校に行くと、たくさんの友達と離れて、今度はいろんな高校の子達と仲良くしていく中で、自分が同和地区ってはっきり言えるような友達をつくっていきたいし、高校に入って初めて同和問題学習をする子もいると思う。でも、今まで私達がどれだけ同和問題学習をしてきたかということも知ってほしい。私は○○高校に行けるかどうかわからないけど、○○高校に行っていろんな子と接していく中で、今日手紙を書いていた先輩に、少しでも力になれるように、同和問題学習に取り組んでいきたいから、勉強を一生懸命やって、○○高校に行きたいです。今日は自分自身を見つめることができました。手紙を読んでくれて本当にありがとうございました。

※

このような内容の「1993自分記録ノート」が、いくつかあった。今まだ胸の内でくすぶっている自分の中の本当の思いを、解き放ってやりたい。自分自身を見つめ、素直になり、勇気を振り絞って暗闇から抜け出していくことで、より温かな、明るい展望が開けてくると思う。そしてそれが確かな絆となっていくような、そんな取り組みをこの１年間でやっていきたいと決意した。

※

そんな思いをもって道徳の授業にのぞもうとしたある時間。それぞれがもっている本当の思いということについて話し合っていこうとしたが、クラス編成をしたばかりで、まだ周囲の目を気にして生活していたためか、発表が少なく、個々の思いが分からずに困り果てていた。そんなとき、自分自身の本音（喉の奥でつっかえてしまい、どうしても言えないような苦しい苦しいこと）をぶちまけた。私を見つめる子ども達の目はぎょろぎょろしていた。その後チャイムが鳴ってからであるが、ようやく私の思いに応えてくれる者達が何名か発表してくれた。

この後で生徒の前でも言ったことではあるが、一体自分の本音とは何であるか？教師は、生徒にどうしても本当の思いを言わせようとしているように思う。それに応えて発表してくれる生徒もいる。しかし、本音を言うときの苦しさや辛さ、恐怖心を教師側がどれだけ分かっているのだろうか。教師が本当の思いや本音を語らずしてどうして生徒に寄り添うことができようか。本当の今の自分の思いを言うということは、本当に苦しいものである。体は硬直し、手には汗をかき、いったん言おうと思っていても、やっぱり喉元でつっかえてしまう。言った後もすっきりしたようですっきりせず、これを言ったことで周りのみんなはどう思っているのだろうかと、神経をとがらせて、しかし平静を装って生活をする。そんな思いを一体教師は分かっているのだろうか。私自身この道徳の時間の後がそうであった。何名か発表はしてくれたが、他の者がどう思っているのかが気がかりで仕方がなかった。

※

そんな思いをひきずりつつ、第１回目の全体学習を迎えることとなった。

前日に学習会南会場で今年度初めての同和問題学習をし、炎のような時間を学習会場で共有できた喜びがあった。それを受けての全体学習である。５時間目に引き続き６時間目の後半、学習会参加者の涙ながらの宣言が始まった。次にあげる文章は、そんな学習会に参加する者に対する生徒の感想である。

※

私は、学習会なんて作って行かせるから、差別されるんだと思っていました。小学校の低学年の頃から「○○ちゃん、今日の学習会は休まずに行くのよ」というのをよく聞いていたので、学習会のことなんて何も知らなかった私達は、誰だって学習会というものに対して、疑問を持っていたと思います。それで、学習会は部落の子が差別に向かっていくための勉強をしていると分かったとき、今まで学習会に行っていた子を思い出して「あの子って部落の子だったのか」とバカなことを思いました。私みたいに、学習会に行っているということで、部落の子を知った人がいると思うので、学習会なんてない方がいいんじゃないかとずっと思っていました。けど今はそう思わないし、それが差別を認めることになるとも思いません。部落出身を教えることは、自分をさらけ出すということで、信頼し合える仲間をつくっていくことだと思います。

※

私は学習会に行っていない。小学校の時に友達が学習会に行っているのを見て、とても不思議だった。学習会に行っている子は「昨日は遊んで楽しかったなぁ」とか「おもしろかったなぁ」と言っていて、私は何となくうらやましかった。そのころは、まだどうして行くのか詳しい理由

は知らなくて、中学校に入ってきてやっと少しずつ分かりはじめた。「部落問題学習なんかするから差別がなくならないんだ」とか「学習会なんかなかった方がいい」という考え方がありますが、私も初めはその通りだと思っていた。けれどそれはおかしいんじゃないかと今は思う。差別がないのと、差別を知らないというのは全然違うことだと思った。今、みんなは差別があることを知っている。だからこそ無くそうと頑張っているんだと思う。学習会に行ってなかったら、差別や部落というのを知ったとき、きっと誤った考えをもってしまい、いっこうに問題は解決できないと思う。学習会に行っているからこそ、差別はいわれのないことであり、あってはおかしいものであるとちゃんと理解している。だから言うときは辛いかもしれないけど「自分は部落である」と２００人もの前で堂々としっかりと発表できるんだと思った。

※

Ｍさんとは２年の時同じクラスだったんだけど、本人が言っていたように、本当に楽しそうに学習会の手紙をもらってその場で見ていました。私は「よくそんなふうにできるな」と思っていました。もし私だったら、その手紙もらったとしてもすぐにしまってしまうと思いました。一緒に帰る子のところへ行って「今度の学習会絶対行こうね」って楽しそうに言っているのを見て「あっいいな」って思えるようになってきたのが、２年の終わり頃でした。学習会に行きたいなって思えるようになってきました。今日、もっと思ってることがあったんだけれど、言葉にならないっていうか、発表したかったけど出来なかったっていうか‥‥。けど、こういう思いって大切だと思うし、これからが大事なんじゃないかなって私は思いました。本当に今日の授業受けて良かったと思うし、今度は絶対発表します。こんな思いみんなに伝えられないっていうのが一番辛いことだと思うからです。今日みたいに思ったのは初めてで、なんかうれしかったです。

※

こんな思いをもっていた仲間の前で、発表することの苦しさ。そしてそれでも発表してくれたことで少しずつ目覚めていく仲間。決死の覚悟で発表した仲間にいったいどれくらいの者が応えることができただろうか。口に出して言わないと、当然伝わらない。今の我がＦ組には、言わさない現状がある。発表した者が殺されていっているのである。

※

２年生までの全体学習での発表は、自分の中の醜い心に猫をかぶって、周りの人と壁をつくっていたと思います。きっと、口では友達とか言っていたのに、本当の友達っていうか、仲間っていうか、そんな人になれてなかった気がします。でもその反面、発表してつないでくれない人に対して、もしかしたら自分は信じてもらえてないのかなってそんな気がするときがあります。

※

３年Ｆ組としてスタートしたときから常にクラスの発表をリードし続けてくれた生徒である。こんな思いを引きずりつつ発表し続けていてくれたかと思うと「ありがたい」と思う反面「絶対にこの子を殺してはいけない」と思い、応えることの大切さを訴えた。

※

私が発表しない理由の一つには「こんな誰もが思うようなこと言ってたっすいなぁ」と思われたらいやだなあという気持ちがあるからです。他の人の意見を聞いていると、自分が考えていることとあまりにも違いすぎて、なんだか発表したら変に思われそうだし、同じような意見だったらもう言わなくてもいいと思ってしまって、発表する気がなくなってしまいます。でもたとえ同じことだって一人だけではなくて、何人もの人が言ってくれた方がたぶんうれしいだろうなあと思うし、発表した人につながって「私もあなたと同じ意見で、こう思う」と伝え合う方が絶対いいと思います。そうした方が、相手にとって大きな励みになるだろうし、自分自身も大きく成長

できるから、発表して損することなんてないと思います。けれどもし、発表した人の後に続いて誰も意見を述べる人がいなかったら「言わなかったら良かった」「言って損したなぁ」と思うかもしれません。そんな思いをさせないためにも、周りにいる私達が意見を発表し、支え合っていかなくてはなりません。「思っているだけではなく、行動にうつしたい」今の自分にはこの心が必要だなぁと思いました。

※

学年当初は発表できずにいた生徒の文章である。今ではこの学習をするとき、発表をリードしてくれる生徒の一人に成長してくれた。またそんな仲間が、徐々に輪を広げてきた。

※

第２回全体学習をひかえ、我がクラスで本音ということが討議の中心になったことがあった。事の発端は、その前日に私の家で交わされた内容からである。

私が初めて部落問題に直面した時のことについては、昨年の全体学習の記録である「峠を越えてPART Ⅲ」の指導案に記載してある。そんな私の部落問題との出会いを初めとして、昨年度の取り組みによって私自身革命とも言えるべき日々を得ることができた。しかし当然のことではあるが、昨年度の取り組みですべてが解決したかというとやはりそうではない。当時の全体学習の時に、私の母親に見に来てもらった。以前差別者として紹介した母である。どうにかして分かってもらいたいという気持ちが参加させた。そのときは「ようやくうちの親も分かってくれたか‥‥」と感慨にひたっていたが、その前日に現にこんなことがあった。

※

私も結婚適齢期を過ぎ、実家に帰るとたびたび結婚の話題がでる。そんなとき近所の幼なじみの話題がでた。

親：「あそこも結婚近いみたいよ」

私：「へーほんと」

親：「聞き合わせに来てるらしいよ」

「聞き合わせ」という言葉に敏感に反応した。今までにも聞き、当然知っていた言葉であるが、なぜかその時は、異常なほど反応した。

私：「うちに聞き合わせに来て、その人がいい人だと思えばなんて言うの？」

親：「そりゃ、いい人って言うわよ」

私：「じゃあ悪い人だと思ったならなんて言うの？」

親：「そりゃ、普通の人って言うわよ」

私：「そんなのって変なんじゃない？」

私には、誰が聞き合わせなどということをするのかはわからないが、やはり聞き合わせをする以上、疑いながら調べているような気がする。その中で、「いい人」と言われれば疑いもしないだろうが、「普通の人」と言われると、少なからず疑いをもつのが世の常でないだろうかと思う。そうやって聞き合わせに答える方は、結局その人物を深く知りもしないで、勝手にその人物を売っているのではないかと思う。

釣り書の話題もでた。親は言う。

親：「結婚は、お互いが不幸にならないためにも、つりあいが大事なのよ。だから、釣り書はいるのよ」

私：「家のつりあいっていったい何なんだ？」

親：「何を訳のわからないこと言ってるの？そんなの世間一般でいう社会通念よ」

私：「じゃあ、世間って何だ？世間て母ちゃん自身じゃないのか？自分自身が世間という盾の後

ろに隠れてるだけじゃないか」

このときすでに、私の腹立たしさは頂点を突き抜け、怒りとなっていた。この後、こういう言葉も吐き捨てられた。

「まだまだ青いね」「おまえ（同和教育に）のめりこんでるんじゃないの？」

今でもこの言葉だけは忘れられない。思い出しただけでも、はらわたが煮えくり返るような思いになる。その場でできる限りの抵抗はしたつもりであるが、しばらくして、

私：「もう話したくないから、話かけるな」

という言葉を吐いてしまった。その時の実際の気持ちではあるが、後から考えれば、それを乗り越え、冷静に話さねばならないのだろうなと思う。今の私は、まだそれができないでいる。世の中にはそれを説得し、乗り越え、結婚をした人が数多くいる。その人達の苦労が、今やっとしのばれてくる。今のままではいけないと思う。自分自身をよりいっそう鍛えていかねばと痛感する。見合いをせざるを得ない自分自身にも腹が立つし、そんな親の紹介で相手を選ばざるを得ない自分自身にも腹が立つ。

しかし、やはり親である。憎みきる事はできない。もっと若い頃は「反抗して家を出て、もう帰って来ないでいようか」とも思ったが、残った末っ子で、年々老いていく両親を見ると、どうしてもそれはできない。幼いときは、休日ともなれば私一人でも遊びにつれていき、遠足や運動会の時には手作りの弁当を持たせてくれた。高校の時には、足のけがで入院した私にずっと付き添い、看病をしてくれた。別に私の家だけでなくどこの家も同じで、親として当然のことかもしれないが、親の情というものをつくづく感じている。そんな両親をどうして放っておけようか‥‥。私の両親は差別者である。その両親に長年育てられた私も差別者かもしれない。責められてもしかたないとは思うが、どうか責めないでほしい。そのかわり、私は両親と共にこの問題に取り組んでいく。私自身が成長しなければとうてい解決できないが、私自身も鍛え、私の両親も変容していけるように頑張りたい。両親と心中するつもりで頑張りたい。

※

このような話を、私なりに生徒の前で一生懸命に話した。生徒にはまだまだ先の事ではあり、どこまで分かってくれたかはわからないが‥‥。ただ、これが今の自分の本音であり、他人には言いたくない事である。この時間を境に、生徒からぽつぽつと本音がでてきた。

※

私の本音は、S君も言っていたけど、部落でなくて良かったとか思ったことがあったということです。今になって思うと、なんて失礼なことを思ったんだろうと思います。私の心の中には二つの心がいて、一つは、仲良くしている友達が部落とか、部落でないとか関係ない、部落ということで苦しんでいる子の心を、少しでも分かりたいと思う心と、前に書いた、部落でなくて良かったと思う心と二つ同じように心の中で生きています。私の心の中にある自分以下を求める差別心をもっともっと勉強して発表してなくそうと思います。

※

私には自分以下を求める心がたくさんあります。しかも数えきれないほど‥‥。でもこの学習をして、自分以下を求めてはいけないことに気がつきました。自分以下を求めるんじゃなくて、自分以上をめざす。それが今の目標です。何にでもすぐに自分以下を求める私は、最低だと思います。最低と気づいた今、私がすることは、そのどろどろした差別心をなくすことだと思います。でも、それは私にしたら簡単なことではありません。だって、今まで習慣のようにしてきたから‥‥。だから恥ずかしくてしかたありません。私が赤ちゃんの頃は、そんな心を持たず、差別とかいう心を持たず、差別とかいう言葉も知らなかったから、広い心で過ごしていました。なぜ、

赤ちゃんの頃はどろどろした心などなかったのに、だんだん成長するにつれ、傷つけたり傷つけ合ったりしなきゃいけないのかと思います。こんな恥ずかしい人間になるのだったら、一生赤ちゃんのままでいたかったなって思います。でもそれは逃げているということで、差別はなくならないと思います。私は赤ちゃんのままがよかったなって思うけど、その反面今の自分があってよかったなって思います。それは、今の自分があるからこそ、全体学習に参加できるからです。

※

上に書いたものは一部で、何人もから今までの自分を振り返っての差別的な話題が涙ながらに語られていった。洗えば、いくらでもアカが出てきたのである。やはり、自分の身内の事を告発するのは辛いものがある。しかしそれを目の当たりにした部落の子ども達は、もっと辛い思いをしていたのではないだろうか。今まで隠してきたこと、気づいていなかったことを明らかにし、勇気を振り絞って発表してくれた仲間に対して「あぁそうだったのか、よくぞ言ってくれた」とまんじりともせずに見つめる生徒達には、「こいつは本物だ」「この子ならつながっていける」と感じたに違いない。つくづく、今まで取り組んできた同和教育は、学校の、しかも道徳や同和問題学習の時間のみの取り組みでなかったかと反省させられる。この問題が休み時間や、家庭にまで及んでいたかというと、そうでなかったように思う。どんな場でもこの問題に対して堂々と訴えることのできる生徒にしていきたい。それが本当の同和教育への取り組みであると思う。クラスで何人かの者は、今までの自分を省み、発表する事で、初めて同和教育に対する意識の芽ばえをむかえたと思う。そしてそれをよりいっそう確かなものへとしていきたい。不合理なことに対して怒りをもち、ともに闘える人間となってほしい。

※

‥‥この前汽車に乗って塾に行ってたら（学校の帰りで制服のまま）おばさんが寄ってきて「あなた板野の子？」と言われて「はい」と答えると、じろじろ見られて、周りのおばさんとひそひそ話始めました。それで「もしかしたら‥‥」と思って、少し怒ったような声で「何ですか？」と聞くと「いえねぇ別に‥‥」と言って去って行ってしまったけど、かすかに聞こえたのが「やっぱりあっちの子は恐いな」という言葉でした。むちゃくちゃ腹立って、本当に「怒鳴りに行ってやろうか、このおばさんらー」と思ったけど、自分が降りる駅じゃなくて降りられなかったので、悔しくて悔しくて一人で泣いてしまいました。なんでまだこんな人がいるのかなと思ってまだ今でもそのこと思い出したら、むかついてむかついて、今度会ったら怒鳴ってやろうと思ってます。絶対におかしい。間違ってる。板野には同和地区あるけど、なんで恐いの。同じ人間だ。もし恐いっていうんだったら、同じ人間を差別できるあなた達の方がよっぽど恐いし、腹立つ。これ聞いてどう思う先生？また手紙で感想聞かせてください。

※

卒業生からの手紙である。これが現実なのである。先日私があるガソリンスタンドに寄ったとき、10年も前に同じバイト先で働いていた知人にあった。当時高校生であった彼も、今ではそのガソリンスタンドの所長をするまでになったという。久々にあった中で、こんな会話があった。

「吉成さんは今何されてるのですか。」

「今は板野中学校で先生している。」

「あっそうですか。あそこらへんはたいへんでしょ。」

ビンとくるものがあり、私の神経が一瞬のうちに研ぎすまされた。

「そんなことないよ。おもしろいし、行くのが楽しいよ。」

そのときの本当の気持ちであり、私自身のささやかな抵抗のつもりであった。しかし後で思ったことであるが、なぜあの時「なんで？」と聞き返さなかったのだろうと今になって思う。「なん

で？」と聞いて返ってくる言葉を私は知りたい。これが現実なのである。この現実を踏まえ、我々教師が今一体何をしなければならないのか。それが問われているのだと思う。

※

‥‥ところで、この前先生のところに電話したけどいなかった。３日間くらい「峠を越えてpart Ⅲ」読んで泣く日々が続いた日でした。（泣き虫はまだなおらないみたいです）理由はこれから書くことです。

高校に入ったら、先生がどうしてか人権部に私のこと入れてました。同和問題についてのＬＨＲしたりするんだけど、ここは同和教育とかしてるみたいで、初めは「自分だったらどうにかやっていける」と思って、うれしかった。２２日に初めてＬＨＲすることになったんだけど、いざ自分がするとなったら何していいのか、みんなにどうしていかないといけないとかわかってもらいたいこととか何もわからないようになってきて、もう一人人権部の子いるんだけど「私なんかは近くに部落とかなかったから、道徳の時間遊んでた」とか言うし‥‥。一応一生懸命な気持ちはその子には言ったけど、伝わったかどうか分かりません。

全体学習でしてきたことは何だったの？

あの時言うたことはきれいごとだったの？

って何回も思った。一人で何か言って「一人で何言よんの」て思われるのが恐いっていう気持ちもあった。自分が板中の子や、３Ｅのみんな裏切るみたいで腹が立って、なんか涙がでてきた。こんなにならないように、一人でも闘っていけるようにって全体学習してきたんじゃなかったんかなって思う。

今回のＬＨＲは、同和問題意見発表のテープ聞くことにして、高校生の書いた

「歩き続けるとき」「いま、僕が思うこと」「人間の最も人間らしい生き方」

この三つの意見発表聞けました。「今、僕が思うこと」ていうのは聴力の低下した人の意見発表でした。後の二つは、部落宣言をした人の意見発表でした。涙を流しながら精一杯話していました。知らないうちに、自分も涙がでてきてた。寝てる子とかいて腹立ってたのと、この人達の気持ちが本当に伝わってきたのとで、涙が止まらなかった。そしたら、クラスの子が「何泣いてるの」て言ってきて‥‥。あの時は本当に一生懸命話したと思う。自分の気持ちちょっとは伝わったと思う。何言ったかはあんまり覚えてないけど、何人かの子が「私寝てた、ごめん」て言ってくれたり「私も同和教育は本当に真剣にしたい」って怒ってるような子もいた。やっぱり自分から言っていかないといけないなって思った。これからは一人じゃないからがんばっていけると思う。今度のＬＨＲは、またがんばろうと思う。まだまだ先のことだけど‥‥。

自分でも高校入ってこんなに役立ってびっくりした。つくづく全体学習って大切だなって思った。こんなに私を成長させてくれた板中のみんなや、３年のみんな、先生の力はすごいなって思った。本当に今、ありがとうの気持ちでいっぱいです。

※

やはり、これもこの春にまぶしいくらい輝きながら巣立っていった生徒の手紙である。今のＦ組の子ども達が同じような思いをもって、堂々と巣立っていけるように、私自身を生徒達にぶつけていきたい。今はまだ全員が全員育ちきっていない。ある生徒は、発表することが精一杯であり、ある生徒は、発表はできても自分の本音が何であるのかというところまで至っていない。仲間の思いに、勇気を出して応えられない生徒もいる。しかしこの資料「意識の芽ばえ」を学習する中で、生徒一人ひとりがいつ・どこで・だれから・どのような状況のもとで部落問題に対して意識が芽ばえたのかを明らかにし、それについてどう感じ、これからどうしていくのかを本音で話し合いたい。以上のような願いのもと、本主題を設定した。

3．ね ら い

今もなお社会に存在する不合理な差別を、自らの生活を省みることにより明らかにし、そのことを自分自身どうとらえるのかを再認識させ、被差別部落の仲間や差別者に対する自分自身のあり方を考えさせる中で、ともに怒りをもって闘おうとする意欲や実践力を身につける。

4．指導計画

(1)これまでの学習

・道徳　「峠」（真壁仁）……２時間
・道徳　「母の願い」（全同教福岡大会より）……２時間
・第１回全体学習「母の願い」（全同教福岡大会より）……２時間
・道徳　「自分以下を求める心」（佐藤文彦）……１時間
・第２回全体学習「自分以下を求める心」（佐藤文彦）……２時間

(2)本時の学習

・道徳　「意識の芽ばえ」（丸岡忠雄）……２時間
・第３回全体学習「意識の芽ばえ」（丸岡忠雄）……２時間(本時1/2)

(3)これからの学習

・道徳　「Ｙ子は獅子になった」（岡本顕史郎）……２時間

5．本時の指導

(1)目　　標

丸岡さんの生き方をとおして、部落差別と自分自身との関わりを明らかにさせるとともに、この問題に対してどう関わっていかねばならないのかを考えさせる。

(2)視　　点　　真実と正義

(3)展　　開

学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点
1　丸岡さんの生き方から、今までの自分を振り返り発表する。	・　生徒一人ひとりが気づかないでいた身の周りの部落差別について発表させる。
（補助発問）いつ・どこで・だれから・どのような状況のもとで部落差別を知ったか？ ・　今まで見過ごしてきた部落差別を明らかにさせていく。	
2　自分自身、部落差別の意識が芽ばえたのはいつかを思い返し発表する。	・　部落差別を「知る」ということと「意識が芽ばえる」ということの違いをはっきりさせる。
3　丸岡さんの生きざまと照らし合わせ今の自分が部落差別とどう関わっているかを発表する。	・　部落の仲間や差別者に対して、これから自分がどう関わっていくことが自分自身の問題としてとらえていくことかを考えさせ、発表させる。

意識の芽ばえ

丸岡　忠雄

「部落」という意識、何歳頃からこの意識は目醒めてくるものだろうか、私自身ふりかえつてみてはつきり記憶していることがある。小学校４年生の秋だつた。同じ部落から毎日学校へ一緒に行く友達のＦ君がこんなことをいつた。

「おれたちは、よそのもんとはちがうんだぞ。部落といつてな、これなんだぞ」と、さも知つたように４本指を出した。

「なに、４本指を出してどういう意味か？」ときき返したが、はつきりしたことは彼も知らなかつた。ただよそとはちがう、ちがうから馬鹿にされているということだけを知つた。

それまでにも、家の者からよく次のようなことを言われた。

「学校へ行つて先生や友人に、兄さんが肉屋の店をしていることを決して言つてはならないよ」

「家で、わし（母）がわらぞうりを作つていることを話すんじゃないよ」

子供心にもそれは強い不安を私に植えつけていて、どんなに心をいためたかしれない。それはどういう理由からか母にききかえすことは出来なかった。

〈遠い町で立派に店を構えてやつている兄、誰よりも親孝行で弟思いで、曲つたことは決してし他人に言つてはならないのだろう〉〈母の作るぞうりは、誰が作つたものよりも丈夫で、はき心地がよかつた。学校で習う二宮金次郎だつて、ぞうり作りをしていたと修身の本にあつたではないか。母がよなべでぞうりを作ること（それは殆んど近所の農家に行つて米になつたり、現金にかえられたりした）が、どうしていけないのだろうか〉

幼いなりに不思議でならなかつたが、それがいい知れない不安となつて胸一杯に黒い翳りをつくり、そのことを口にすることが恐ろしくなつた。そうした話題が出ると、さしさわりのないウソをつく知恵を、誰に教えられることもなしに覚えてしまつていた。

その不安が、このＦ君の言葉ではつきり定着させられてしまつた。〈ああ、やつぱり僕たちはよそとちがうのか〉そうした絶望的な想いが広がり、タカスという生れながらのふるさとの名を口にすることが苦痛になつた。”あなたのお所はどこですか”と訊かれる度に思わずドキリとして素直に口に出ず、「駅の少し東の海辺です」とか「川口（隣接した一般部落）です」とか言つた。タカスと言うふるさとの重みが、年ごとに耐えられぬ程にこたえてくるようになつたのである。

中学２年を終えて、ふるさとをはなれて熊本の学校へ入つたが、私にとつて”部落”は絶対的なタブーであつた。まだ、幼い少年達の集団生活の中で、部落のことはよく話題にのぼつた。地元の熊本の少年もそうだつたが、特に京都から来ていたＭ君がしばしば話題にしていたが、京都ではそれだけ問題が多かつたのであろう。そうした話が出たときも知らん顔でその話題に加わつたりした。こんなわけで、異郷でくらす私にとつて、私の事を知つている故郷の者と出会うことは、何より恐ろしいことだつた。故郷の者に会えるという歓びより、私のことをしゃべつてしまうのではないだろうかというおそれの方が先立つからであつた。

こんなにも私を苦しめる”部落”でありながら、しかし20歳近くまで私には全然”部落”というものが解つていなかつた。その現状は勿論のこと、部落の歴史についても進むべき方向についても、まるで見当のつかないことばかりであつた。こんなに強い差別が残つているからには、きつと異民族の後裔にちがいない。或は、よほど悪いことでもしている罪人の末とでもいうのだろうか。または、何か決定的な悪い遺伝でもあるというのだろうか。あれこれと想いめぐらしたけ

れど、誰も教えてくれるものはいなかつたし、読むべき本も知らなかつた。

こんな不安と怖れのままで、小学校の代用教員となつた私が、教え子からいきなり４本指つきつけられて大きいショックだつたことはいうまでもない。まるで正体不明の怪物に首をしめつけられている想いであつた。不安は大きくなるばかりで、私には抗するすべがなかつたのである。

不安と焦操の中で、折角の勤め先も面白くなくなつた。たつたそれだけのことと思えるのだが、正体が解らぬことがいつそう私を焦らだたせた。この黒い日々に、はつきりと光りを与えてくれたのは、その後、師範学校研究科に在学中（小学校在籍のまま研修のため半年通わされた）に於ける潤間（うるま）先生との邂逅である。終戦間もない頃であつた。まだ、戦時中の皇国史観のカラをくつつけた私たちにとつて先生の話は、青天の碧瀝とも言える程に新鮮なものであつた。先生の元で、まとめたレポート「部落について」は私の人生観にはつきりした道標を与えてくれた。私のレポートは部落の歴史について、ごく概略的に、あちこちの本からの抜き書したものに過ぎない粗末なものだつたが、それでもそこに見る部落の生いたちは、私にとつては全く未知のものであり、まとめながらも激しい怒りを抑えることができなかつた。私たちの先祖は何も悪いことをしていたわけではない。日本民族以外の何者でもない。それは為政者が、人為的に作つた階級ではないか。それも実に巧妙に、下層の農民を”生かさず殺さず”式に徹底的にしぼり取る為に、農民の下にその苦しい不満のはけ口としてこしらえたものではないか。明治維新と大きく時代は変つても皇族、華族、士族、平民といつた階級をそのまま温存するような政府が、一片の太政官布告で穢多・非人の解放令を出したところで、それが実質的な解放と程遠いことは当然のことだろう。私は真実を知つてはじめて眼のさめる想いがした。歎くよりも怒ることだ！

後年私が部落についての詩を書くようになつた所以である。

※　〈ふるさと遠く　ひとりになると／わかもののふところでは／「ふるさと」が急にずっしり重たくなる／「部落」の話など出ると　とたん／息をつめ／ケンメイに　平気を装いながら／ひそかに　ふところをまさぐってみる／みんなに調子を合わせるのだが／ふところにはいつしか血がにじんでしまっていたりする／ひきむしろうにも／「たかす」は決して剥ぎとれはしない〉

［『高州～わたしのふるさと～』詩集「部落」より抜粋］

誰にも部落問題との出会いがあるはずです。その部落問題が自分の心の中でどんな位置をしめてきたのでしょうか。どこか遠くの世界のものであったり、あるいは、「ずっしり重たいもの」であったりするのです。誰の心の中にも、部落問題が何らかのかたちで生き続けてきたことは確かだと思います。

丸岡忠雄さんの資料「意識の芽ばえ」を通して、自分自身が部落問題と「いつ」「どこで」出会い、そして「だれから」「どのように」聞かされたか。またその時、自分は「なに」を感じ、「どのように」しようと思ったのかをふりかえり、明らかにしてください。さらにその後、部落問題とどうかかわって生きてきたか、そして、どうしようと考えているのか、明らかにしてください。

このように部落問題と自分のかかわりを明らかにすること、そして、そのことを友と語り合うことこそ、差別の檻（おり）から自分自身を解放していくことになるのです。

しかし、自分自身を解放していく過程は重苦しくつらいものがあったりしますが、自分の本当の思いを語り合うこと、真実を語り合うことが本当の仲間をつくっていき、それがやがて大きな喜びに変わっていきます。その喜びを求めて、自分の思いをしっかりと深め語り合ってください。

【授業記録】第３回全体学習　（1993年度板野町同和教育研究大会）

主題　真実を求め，ともに怒りを　　資料　「意識の芽生え」

出典　詩集「部落」『五本目の指を』（丸岡忠雄）より

1993年６月15日（火）５校時

３年Ｆ組　授業者　　吉成　正士

Ｔ１：今から５時間目の公開授業です。「意識の芽生え」を通してこの１時間。いいですか，Ｆ組として，３Ｆとして発表する時間はこの５時間目１時間のみです。今持っているものを，本当に精一杯，素直に，勇気を出して，発表してくれたらそれだけで十分だと思います。いろんな発表が出てくると思います。どんな発表が出てきてもいいと思う。今までの，今までね，先生もやってきた道徳・同和問題学習の授業っていうものを，くつがえすような，そんな５時間目でありたいし，そうしていきたいと思います。心が眠ることのないように，心が眠ることのないように，５時間目過ごして下さい。蒸し暑いですけども暑さを忘れる一瞬ができてくると思います。その一瞬が味わえた人は５時間目，本物になれたっていうことだと思います。しっかりと，思っているものをすべて吐き出してみましょう。

まずこの「意識の芽生え」という資料ですけども，丸岡さん，丸岡忠雄さんが部落出身であるっていうことを明確に知ったのは，ごく後です。それまで家の人から『言うなよ』とか，もしくは友達から『俺たちは部落やぞ』って言われても漠然としかとらえられなかった。先生の場合で言ったら，繰り返し言うことになると思いますけど，本当に部落を知ったのは，はっきりと覚えてるのは高２の時です。部落差別っていうのを本当に明確に体験したのは高２の時です。不慮の部活の事故でね，体当りをした，衝突をした相手の子が部落の子であった。それに対してとやかく言う『部落の子だから仕方がないな』ってことを言う。今から思うとその時っていうのは，確かにその子は弁護できてたけども‥‥。その子は弁護できた。本当にいいやつだった。本気で弁護したつもりです。精一杯の弁護はした。けども，部落差別を解消しようとしてたかというと，やっぱりそうではなかったと思います。なぜか。なぜか。同和教育を受けてなかったからです。それに関しては本当に，今から思うと，中学校時代に何をしてきたのかって思う。高校時代何をしてきたのかって思う。それが先生の部落差別との出会いです。知った最初です。

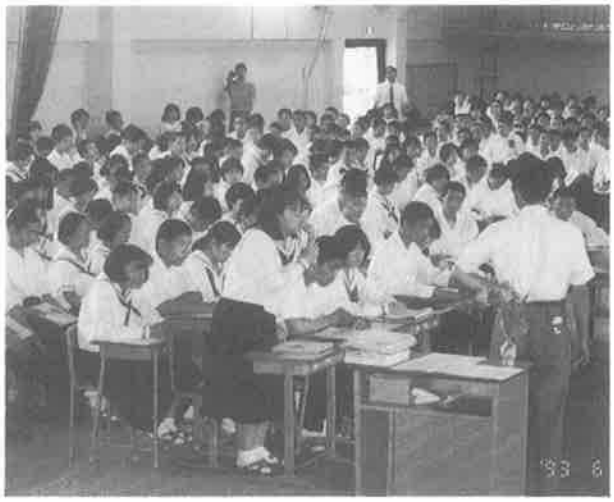
昨日もこの授業をしましたが，昨日の続きからいきましょう。みなさんにとって部落差別を知ったのは，出会いっていうのは，どんな感じで・いつごろで・誰から，ってそういうのだったでしょう。それを言っていってほしいと思います。発表してください。手を挙げてください。

ＳＨ（男）：ぼくが知ったのは，小学校５年か６年の時の学習会の時でした。

ＫＫ（女）：私が部落差別っていうことを知ったのは小学校の高学年で，道徳の資料を通して知りました。だけどなんか資料を通して学習する前から，部落差別っていう言葉を知っていたような気がして，それがなんかとても不思議です。

ＫＭ（女）：私がはっきり知ったのは５，６年の学習会の時だけど，昨日道徳の時間に先生に『本当にその時初めて知ったのか』って言われて，よく考えたら，やっぱり小学校２年か３年ぐらいの時に家の人に『あそこの子とは遊んではだめ』とか言われた。昨日家に帰ってよく考えてみたけど，差別を一番に教えたのはやっぱり家の人ではないのかなと思います。今日，私の親が来ているけど，このことを言って全然悪いと思っていません。

Ｔ３：部落差別を本当にどこで知ったかっていうのを，まず最初に明らかにしていかなければならないと思います。『学校で知った』それもほんとにあるかもわかりません。けど本当によく思い返してみる必要があると思います。それがこの学習をする原点のような気がします。それなくしてね，資料どうのこうのっていうのはないと思うんです。まず自分自身の部落差別との出会いっていうのを最初に明らかにしていかなくてはいけない。しっかりと考えださないといけない。他どうですか。続いていきましょうか。



ＹＹ（女）：部落差別っていう言葉を聞いたことはなかったような気もするし，聞いたことがあるような感じもするんだけど，小４の時，汽車に乗っていて『どこから来たの』と誰か知らないおばさんに聞かれて，その時に『板野』って答えるとそのおばさんが『こわいだろ』というふうに言った。その時は何も思わなかったけど，今考えたらそれが部落差別っていうことですっごい腹がたつ。

Ｔ４：小４ですね。

ＨＳ（男）：ぼくが部落差別を知ったのは，小学校５年生の時先生から学習会で教えられました。

ＫＲ（女）：私が部落差別という言葉を知ったのは，小学校の高学年の時だったけど，小学校４年生の時にけがをして，そのけがをさせた子がたまたま部落の子であって，近所の人に『あっちの子はこわいだろ』とか聞かれました。

Ｔ５：今Ｋが言ってくれたことは，本当に厳粛に受け止めなくてはならないと思う。Ｙの言ったことについてもそうだと思う。なんでな，なんでそれを持ち出す必要があるのか。なんでな，そういうのを出してくる必要があるのか。どういうつもりで言ってるのか，本当に腹がたつ。本当に腹がたってくる。いいですか，なあなあで過ごしてはいけませんよ人間ていうのは。なあなあで過ごしてはいけません。なあなあで過ごしてたら全然進みません。絶対にそうだ。絶対怒る時には怒らなくちゃいけない。それがなけりゃ人間じゃない思う。なあなあで過ごしたんでは，人間じゃないよ。今言ってくれたことについてどうですか，他の人。言ってみてください。

ＫＭ（女）：私も５，６年の時に学習会で私たちが住んでいる部落のことでまだなんか偏見を持っている人がいるって聞いて腹がたったんだけど，いまＫさんやＹさんが言ってくれてすっごく腹たったけど，ＹさんやＫさんが言ってくれたことがすっごく嬉しかったです。

Ｔ６：心を開いていくことで本当に喜びがわき出てくる。わざと出すものじゃない，わき出てくる。本当のことを言ってくれる喜び。あるものを，今の胸の中で温めているものを出してくれた喜び，そういうのをみんなで味わいませんか。今何人かの人が発表してくれたことに対してどうですか。言ってくれませんか。

ＳＴ（男）：ぼくが部落のことを聞いたのは，３，４年の時で親から聞いたんだけど，ふつう３，４年ていえばちょっとしか，かすかに聞いたくらいなんだけど，たぶん短かったと思うんだ

けど，どうしてかずっと覚えてるんだけど、なんでだろうと思うけど，何か植え付けられてきたっていう感じがします。

Ｔ７：よく耳を澄まして聞いてください。

ＹＹ（女）：さっき４年生の時聞いたって言ったけど，５，６年ぐらいの時に道徳の授業の時に部落差別って聞いたけど，それがそうだっていうのがわからなくて中学校に入ってもそうかなって思うぐらいで何にも考えなかって，３年生になって絶対そうだってわかるようになった。

Ｔ８：あるんですよね。そういうのがね。そういうのがあるんですよ。知らず知らずのうちに積もり積もっているものがあるんですよ。覚えてるのなんかほんとに氷山の一角です。自分の頭の中で，意識の中でこれが部落差別だ，これが部落差別なんなんだって意識したのは本当に氷山の一角です。いいですか，氷山の一角ですよ。それを見つけることから始めなくてはいけません。そこを暴いていく必要があるんです。他にありませんか。耳を澄ましてください。神経をとぎすましてください。

ＯＹ（女）：昨日は中学校に入ってからって言ってたけど，家に帰ってよく考えてみると，小学校の３，４年の時だったと思うけど，なんで学習会があるのかなって思って勉強とか教えてくれるからいいなあと思ってててお母さんとか家の人に聞いてみると，そんなものないほうがいいとか言ったような気がします。たぶんそうだったと思います。

ＫＩ（男）：小学校の時，親に友達の場所を聞かれて言ったら，『あそこらは気をつけなさいよ』と言われたことがありました。

ＳＫ（男）：小学校の６年生の時に，道徳の時間か何かで，部落って聞いたんだけど，ただ部落って言葉だけ知って中身までは全然知らなかった。

ＫＨ（女）：私も小学校の道徳の時間に勉強して，部落って言葉を聞いて，地域だけで差別されるのは本だけの世界で，現実にあるとは信じられませんでした。

SUＫ（女）：私も昨日は５年生ぐらいの時に勉強したと思っていたけど，考えてみれば小さい時に友達と遊んでいて友達がけがをして，そのけがを負わせた子のことをお母さんに言ったら，『あそこの子は悪いからなあ』とか言っていたのでそれがやっぱり一番最初に知ったんだと思います。

ＴＪ（男）：ぼくは小学校５年生ぐらいの頃，学習会場で先生から教えてもらいました。だけどその意味があまりわからなくて中学校１年生の時，学習会の一泊研修の時にはっきりとわかりました。

ＯＭ（女）：私が初めて部落を知ったのは小学校５，６年の時に資料を使って勉強した時だけど，本当によく知ったのは私の友達のことをお母さんが『あの子部落だけどそんなこと本人の前で言ってはいけませんよ』と言った時でした。

ＫＹ（女）：私は３年生の時家の人に『あの子と遊んではだめよ』と言われてそのまま言うことを聞いていたけど，今思えば部落差別かなって思います。

ＫＭ（女）：部落差別を知ったのは，はっきり知ったのは５，６年だったけど，Ｙさんも言ってたけど，家の人が『あそこの子とは遊ぶな』とか言って，それが部落差別ってわかったのは３年生になってからで，習慣のようにそういうことを聞いてきて，今思えば家の人の差別心を私が全部うけていたように思います。

ＩＫ（女）：昨日は小学校の道徳の時間に知ったって言ってたけど，本当はなんか周りの人がしゃ

べっているのを聞いて，部落っていうのを知ったんだと思います。

OBK（女）：私が部落差別をはっきり知ったのは，小学校の高学年の時に学習会について勉強した時で，私の身の周りには学習会に行っている子がたくさんいたので，初めて身近に部落差別ってあるんだなあと思いました。

ＭＫ（女）：私が初めて知ったのは，小学校に入って道徳の授業をした時に資料を使ってやったんだけど，その時あまり気にしてなくて，中学校に入って家で新しくできた友達のことを話ししてたら家の人が『部落の子とあまり関わってはいけませんよ』って言われました。

ONK（女）：小学校の低学年，２年ぐらいのときに部落っていう言葉は知ってて，内容は全然わからなくって，はっきりわかったのがＫさんも言ってたけど，学習会に行っててプリントみたいなのを配ってくれてそれを読んでみんなで学習した時に，はっきり部落差別がどんなのかってわかったような気がします。

Ｔ９：あといませんか。あのね，今出てきましたけども，本当にね確かに部落差別っていうものを，学校で教えてくれた，もしくは学習会で勉強した，家の人からちゃんとした形で聞いた，いろいろあると思います。けどね，今言ってくれたけども無意識のうちに，いつ誰からともなく，どこからともなく，すっと耳に入れられる，そういうことがあるんですよ。でしょ。先生だってそんな感じがする。確かに高２の時に知った，けどもそれよりも以前にどこかで聞いてきたような気がする。何かって言われるとそれはわからない。わからないけどもそれはあるような気がする。部落なんていうのは聞きませんよ，聞きませんけども別の形で耳から入ってくる，入れられる。そういうのがあるんですよ。それを絶対に明らかにしておかなければいけません。それなしでね，同和教育っていうのは絶対できないですよ。そうでしょ。資料どうのこうのってできないですよ。そうでしょ。ただね，今言ってくれたのもありますけども，それから進んでね，私が部落差別っていうのを知ったのは高２の時だっていうのは話しました。けどね実際にその時に意識の中で持ったかっていえば，やっぱりその時じゃなかった。その時には反論できなかった。なんでか。起源も知らない，何も知らない，知識も何もない，何も反論できない，本当に意識の中に明確に出てきたのが，高校の時ではないんです。大学入った時でもないんです。教職に就いてからですよ。先生になってからですよ。それまで何も知らない。ひょっとしたら教えてくれてたかもわかりません。けども意識の中にないんです。本当に先生が，私がです。私が部落差別っていうのを意識として芽生えることができたのは先生になってからです。みなさんはどうですか。部落差別に対しての意識が本当に芽生えたっていうのは，知ったっていうのと意識が芽生えたっていうのとは別物だと思います。どうですか，ひょっとしたら一緒の子もいるかもわかりません。，そういうところをちょっと聞かせてもらえませんか。部落差別に対する意識が芽生えたのはいつとかね，どういう時とかね，それどうですか。部落差別に対する意識です。意識が芽生えだしたのは。どうぞつなげていってください。

ＫＭ（女）：私が部落差別に対して意識が芽生えたのは，中学校の３年生になってからです。自分が部落の人間ていうことに対して別になんとも思ってなかったけど，３年生になってから今まで心の中だけで思ってたことがみんなの前で言えて，この間の学年の意見発表会の時とか全校生徒の前での意見発表会の時に自分が部落の人間って言った時が，私の意識の芽生えだと思います。

ＹＹ（女）：意識の芽生えかどうかよくわからないんだけど，中３になるまでずっとやっぱり自

分には関係ないってどこかで思ってて，第１回目の学年での全体学習の時に泣いてる子とかいてそれを見て，差別に対する腹立たしさとか怒りとかを感じるようになった。

Ｔ10：仲間の言葉で目覚めていく子がいるんです。いいですか目覚めないといけないんです，みんなが目覚めれてないといけないんです。どうですか，意識が芽生えたっていうのは，いつどんな芽生えですか，他の人どうですか。本当に芽生えたのはいつかってことです。知ったのと芽生えたのとは別のことが多いです。

ＳＴ（男）：中１になって同和問題学習の勉強をしたけど，それでもなんかまだ全然自分のことではないって思ってずっとそんな感じだって，中１の半ばぐらいで家の人がまた差別してその時言い合いになって，これで本当にあるってわかって，１年生の時よりも取り組むようになってそれでも今でもだけど，自分のこととして考えれてないような気がします。芽生えてないのかもしれません。

Ｔ11：それがなんでかっていうのはね，また後で話ししましょう。

ＫＫ（女）：私の意識の芽生えっていうのは中３になってからの第１回の全体学習をしてから自分の親がどう思っているか聞いてみたくなって，同和問題のことを家族で話し合った時だと思います。

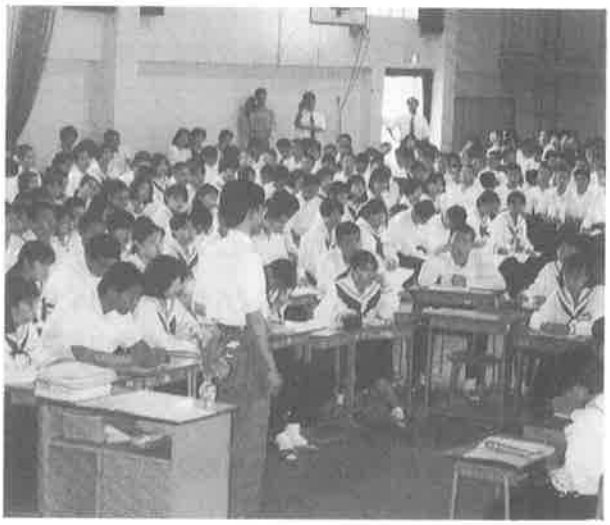
Ｔ12：その話し合ったことがもし言えるんであればね‥‥。ほか言いたい人いませんか。自分の意識の芽生え。あのね，意識が結局芽生えないとね，この取り組みっていうのは上っ面だけの，表面だけの取り組みになってしまうんですよ。いいですか。高校行ってね，作文書かされてね『ええこんなの書かないといけないの。３枚も書けないわ。同和教育って何それ。私なんか道徳の時間ずっと遊んでたもん。』って言ってる子が育ってるんでしょ。そうでしょ。今高校で育ってるんでしょ。怒らんですか。怒らんですか。昨日学習会場行ってました。なんで泣かなきゃいけないんですか。なんで大勢の子が泣かなきゃいけないんですか。そうでしょ。なんで泣かなきゃならないんですか。今意識が芽生えた時のことを言ってくれた。まだ芽生えてない子もいると思います。問題はですよ，よくこんなことがあります。『発表しようと思います』って感想文書いてくれる子がいます。けど発表できない。思いは持ってても発表できない。けど行動に移せないと話しになりません。今みんなに何ができてるかです。今みんな自身が何ができてるかです。何をしようとしているかです。何がしたいのか，何ができてるのかってことです。先生にとっての闘いの場っていうのは，学校だけだったら先生の時だけです。先生にとっての闘いの場は，やっぱり家だと思っています。家が闘いの場だと思います。それ以外にもありますけど，ひとつはやっぱり家が闘いの場だと思ってます。もしそんなのがあれば言っていってもらえませんか。今自分が何をしてるか，何ができてるか，何をしていかないといけないのか，そういう取り組みが，思いがある人どうか言っていってほしい。時間残りわずかです。がんばりましょう。耳を澄ましてください。

ＹＹ（女）：中学校入ってきてずっと学習プリントとか書いてみんなで意見を言っても，やっぱり３年生になるまで本音とか本当のことを言えずにいて，やっぱり今ずっとこうやってみんなの意見を聞いたり自分の意見を言ったりすることが自分に一番大切だなって思う。

ＫＭ（女）：中学校入って１年生からずっと全体学習とかやってきて１，２年の時は作文とか感想文とかに，発表したかったけど発表できなかったとか書いて，３年生になってもう口だけとか書くのだけとかいうのはやめようと思って，全体学習１回目の時も２回目の時も発表できたし，発表できたのはやっぱり信じる仲間ができたし，本音を語ったことがすっごく苦し

かったけど，言わなかったら言った人から見れば私っていうのは絶対差別者に見られるような感じがして，そういう感じに見られるのはすっごくいやだったから，発表してこれからも何回か全体学習があると思うけど，発表していきたいと思います。

SAK（女）：私の中にもまだ差別心とかまだそんなのがたぶんあるから，自分の中からなくしていきたいです。



ＯＹ（女）：１年生の時とかは，かっこいいことばっかり書いて自己満足していたところがあって，３年生になって意見発表会や全体学習で泣いてる子がいて，そのままにさせたくないなと思いました。私にできることは，言いたくないことを，いやだけどそのまま言うことだと思います。

SUK（女）：私も１年生や２年生の時は作文とか感想文で『こう書いとけばいいわ』と思って適当に書いていました。でも３年生になって，自分から『私は部落です』と言ってきた子がいて，そういう子を一人にしてはいけないと思って，応えていかなければその子が死ぬと思って，だからこれからもその子たちをひとりにせず応えていってあげたいと思います。

ＮＭ（男）：ぼくが今一番しなければならないことは，本音で発表していかなければならないということだと思います。

T13：あなたにとっての本音は何であるかってことですよ。それを突き詰めていかなければいけない。以前にも話しましたけども，こうやって一生懸命やっているつもりでいます。吉成は。一生懸命やっているつもりでおります。昨日も言ったけども，本当にそれが本心なのか，って思う。ひょっとすればその自分は気に入られるための偽りの自分でないかなって思う。うそものでないかなって思う。毎日毎日思う。１日に３回は顔を出してくる。本当にこれって自分がしているんだろうかって思う。自分の本心です。ひょっとすれば本当は気に入られんがためにしてるんじゃないかなって思う。けど心のどこかで打ち消す。違う。違う。自分は本気でやってる。本気でやってる。本当に一生懸命している。本当になくしたいと思ってしてる，って打ち消す。けどもやっぱり出てくる。今してる自分はうそでないんかなってやっぱり出てくる。また打ち消す。毎日毎日繰り返しです。自分の中にある差別心との闘いです。けど絶対負けたくない。絶対負けたくない。だから実践をしていく。行動にうつす。そんなものないですか。他どうですか。今の自分が何ができてるのか，何をしていかなければいけないのか，どんなことをしてるかってことを，発表してもらえませんか。みんなにその想いを聞いてもらいましょう。持ってるもの全部吐き出しましょう。言わないとわかりません。よく聞いてください。耳を澄ましてください。神経をとぎすましてください。

ＯＭ（女）：仲間が言ってくれたことに対して，本当に思っていることを言って応えてあげることが今の自分にできることだと思います。

ＯＣ（女）：私は今本当に考えてるかなって思うけど，やっぱりみんなが言ってくれてるんだか

ら私も言わなければいけないと思って今言いました。

NNH（男）：じっと座っていたけど，みんなが発表しているからここで立って言わなければいけないと思った。

ＫＲ（女）：３年生になって初めて本音を言うっていう苦しさがわかったけど，本音を言った人が後悔をするような授業をしてはいけないと思います。

ＳＫ（男）：ぼくは本当に本音を言えてるのかって今思うんだけど，本当にせっぱつまらないと今まで何も言えなかったんだけど，これから本音をちゃんと言えるようにしていきたい。

ＭＭ（女）：１年生の時から同和問題学習をしてきて１，２年の時は自分では同和問題学習に真剣に取り組めていたと思っていたけど，今思うと真剣に取り組めていませんでした。それは３年生になってこの間自分の本音をやっと言えたからです。これからもこわいって思うかもしれないけど，それをがんばって本音をみんなの前で言っていきたいです。

ＫＨ（女）：私は３年になるまで道徳の時間ていうのは学習プリントをしたり作文を書いたりばっかりだったんで，３年になって道徳の授業で話し合いになってなんかすごい自分の意見を言うのがいやでした。それで手を挙げれるようになったけど，沈黙が続いたり，続いてあげられなかったりしました。だから私にできるのはみんなにこたえていくことだと思います。それで日常生活とかで休み時間とかでも，部落問題を普通に話せるようになることだと思います。

ＨＴ（男）：手を挙げている人が，不安にならないように続けていってあげたいと思います。それと自分が思っていることを素直に言えるようにしたいです。

TAK（女）：前に親に『部落差別ってどう思う』って聞くと，『知らない』とか『そんなことしてもむだだ』とか言ってすごく腹がたったけど，そうやって親に聞いている自分も逃げながら聞いていたような気がします。そんな親を持っている自分もまだ差別心を持っているので一生懸命みんなと闘っていかなければと思いました。

ＴＪ（男）：ぼくは差別されてる側ががんばって発表して立ち向かっていかなければいけないと今思いました。

T14：ありがとう。今TAが言うてくれたこと。日々あゆみ，記録ノートに書いてきてくれるんです。家での本当の闘いの実践記録です。闘いの実践記録です。それを綴ってきてくれる。ああまた一人こうやって仲間ができた。こうやってまた続いてくれてる。本当にたまらない喜びがこみ上げてきます。また一人こうやって仲間ができてきた。ずっとつながっていける，いつまでもつながっていける友達，仲間ができているっていうのを本当に思う。今のは本当にさわりだけです。さわりだけ言ってくれました。言葉にすればなかなか詳しく言えない，それをさわりの部分だけでも本当に言ってくれた。本当にTAに感謝したいと思います。他に持ってるものあると思います，どうですか。今自分がしなければならないこと，すべきこと，していっていること，どうですか。はき出してください。

ONK（女）：中１と中２の時に，本音が全然言えなくって，３年になってＦ組になってなんかみんな自分の本音言ってくれてうれしかって，やっぱり自分も本音言わないといけないなあと思って，３年になって言えるようになったけど先生も言ってるように，自分との闘いは家と思ってます。学校で本音が言えるのに何回も親の前で同和問題の話しようとしてもなかなか切り出せなくて，こんな自分にすっごく腹がたってます。

T15：ありがとう。

NGH（男）：家で親がよく差別していたけど，言い返すことができなかったのでやっぱり家での話し合いも必要だと思います。

TOK（女）：私も１年に入ってきて部落問題学習っていうことで，自分も部落って思われたらいやだなあっていう感じもあったし，人事のように見ていてみんな全体学習とかあっても３年生の全体学習を見ていても涙でこたえていたけど人事のように見ていて，ひとつも本気で取りくまなかって，感想文を書いても本気であまり取り組めてなかったけど，３年生に入って涙で応えてくれている人がいてすごく他人でないように思えてきて，これからももっと本音を出してがんばれるようにしたいです。

T16：仲間の想いにこたえていくことで，絆がどんどんつながっていくんです。

ＹＹ（女）：今まで教室とかで発表してきたけど，その中で，自分の中でこわいとか助けてとかいう気持ちがあって，そういうことを言っていかないけないとずっと思ってて，発表した人をひとりにしたくないし，自分自身強くならなければと思う。《涙》

T17：がんばれ，がんばれ。

OBK（女）：今まで何かしなくちゃと思いながら，何もできなかったのは，自分の本音を素直に言えなかったからだと思います。でも今はなんか，自分でも何かせずにはいられないっていう感じです。

ＩＫ（女）：私は今しなくてはいけないことは，やっぱりみんなが言いにくいのに言ってくれたことに続いていけるようにすることだと思います。

ＫＭ（女）：私はまだ１回しか親と話してないけど，ちょっとは自分自身変えれたように思う。そうやって親と話できたのも，先生が『闘うのは家だ』って言ったからと思う。先生が言ってくれなかったら，私だって親の思ってることわからないし，親だって私の思ってることわからなかったと思います。私だってまだ親と１回しか話してないから，全部が全部親の気持ちをわかったわけじゃないので，これから少しずつ家で闘っていこうと思います。

ＭＫ（女）：私は家でたまに，部落問題学習のことを話したりするんだけど，それを話した時，やっぱり親の正体っていうものをわかってしまうから，今まであんまり話したことなかったけど，これからＫさんが言ったように自分の思いもわかってほしいし，親の思いもわかりたいと思うから家でちゃんと話していきたいです。

T18：持ってるものがあるんですね，それをしっかりと温めて発散させていかなくてはいけません。今発表してくれたＯやＹやＫや，Ｍの想いにほんまつなげてほしいと思います。どうですか，持ってる者は応えておいてください。ないですか。《チャイム》

ＹＫ（男）：これだけの仲間が自分の意見を発表してくれたんだから，自分もそれに応えていけるようにしたいです。

SUK（女）：私もまだ家で話せる状態が作れてないんだけど，みんな親に話してるので私も親の意見も聞いてみたいので，勇気を出して聞いてみたいと思います。

TAK（女）：このＦ組になって，泣いて語ってくれる子や自分の本音を語ってくれる子がたくさんいて，私はとてもうれしいです。みんな信じ合えるような仲間がたくさんいるので，そういう子らと一緒にがんばっていきたいです。

ＯＭ（女）：私も自分記録ノートやあゆみに，家で話し合ってくるとかいっぱい書いていたけど，未だにまだ話せていません。なかなか親に話できる状況が作れなくて，今も困っています。今日は話できる状況を作ってみたいと思います。

SAK（女）：私も家ではそんな話は全然しないし，自分から話そうともしなかったけど，クラスの中にはもう何回もお母さんとかお父さんとかに話している人がいるから，私も絶対話をしたいです。

ＳＨ（男）：ぼくは発表を聞いているだけではなく，発表をしていきたいです。

ＫＫ（女）：私は親と同和問題について話し合って，親の知らなかった部分がわかりました。まだ，言葉では『部落差別をしてはいけない』って言ってるけど，問い詰めてみたらやっぱり親は差別していて本当にこれをなくしていかないかないといけないなあって思いました。《感動》なんかこんな中で言ったら，私まで差別してるみたいに見られるかと思ったから，今まで言えなかったけど，信じてほしいと思います。

Ｔ19：もう時間ないけど，応えてくれる子がいたら発表して下さい。

ONK（女）：今のＫさんの発表聞いて，自分もこのまま親と話せずに逃げてばっかりいないで，絶対今日家へ帰ったら，今日のことを親と話し合いたいと思います。

TOK（女）：私は，部落差別とかいろいろまだ汚い心もいっぱいあるから，人を傷つけてしまいます。そんな自分を変えていくためにみんなで頑張っていきたいです。

Ｔ20：いいか闘えよ，これからだぞ，スタートはこれからだぞ。

ＫＹ（女）：私は今まで言いたいことを心の中で閉じこめていたけど，これからはみんなに続いて発表していきたいです。

ＫＭ（女）：私も絶対負けないで闘っていこうと思って，いつも毎日のように自分自身に問いかけています。そう言えるのも，やっぱり先生の一人の仲間として大勢の仲間と出会えたからと思います。今すごくそんな仲間に出会えて自分が変われたようでうれしいです。

Ｔ21：先生違うんだぞ。一人の人間です。この学習に先生も生徒もない。一人の人間ですよ。

ＭＭ（女）：『親と話せ』って先生が言ったので私は家で話したんだけど，なかなかノートとかに書けなくて話したことは話したんだけど，親に同和問題学習なんかしても絶対なくならないって言われて，《涙》なんかすっごく腹たったんだけど，私の方から逃げてしまってきちんと最後まで話せなかったんで，今度は逃げないように最後まで話し合いたいです。

Ｔ22：話せるんだったらね，すぐ話せるんですよ。でしょ。話せることだったらね，悩む必要はないんですよ。すっと話せるよ。なんで話せんかです。話して，途切れさされて，そこで終わってしまう。次の句が言えない。次の言葉が言えない。なんでか。なんでかです。なんで次の言葉が言えないのかってことです。そんなにしてしまったのは一体誰かってことです。それを絶対明らかにしておかないといけないんです。家でこうやって闘ってくれてる仲間がいる。本当にこの上ない喜びがあります。がんばれよ，絶対がんばれよ，共にがんばらんかよっていう思いが本当にこみ上げてくる。みんなでそれを共有していきたいです。

次６時間目に，今度は今の授業見てくれて，聞いてくれて，また３年のＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅの子，もしくは１，２年の子が今のを聞いて，それにしっかりと応えてくれると思います。その中でまたみんなもそれに応えてやってほしい。いいですか。闘いは今スタートしたところです。意識が芽生えてスタートしたところです。闘わないと、自分の存在がなくなるぞ。闘っていないと、自分の存在がなくなるぞ。がんばっていこう。言いたい人ためといてください。６時間目に言ってください。終わります。

【授業記録】板野中学校全校授業（1993年度板野町同和教育研究大会）

主題　真実を求め，ともに怒りを

資料　「意識の芽生え」　出典　詩集「部落」『五本目の指を』（丸岡忠雄）より

1993年６月15日（火）６校時

板野中学校全体　授業者　森口　健司

Ｔ１：３Ｆの授業をうけて６時間目の全体学習をすることになります。蒸し暑い状態で本当に熱い思いになっている子もいるかと思いますけど，自分の一番しんどい部分をさらけ出してくれた３Ｆの仲間，大事な大事な仲間に，吉成先生につながっていく時間をみんなで持ちたいと思います。全体で礼をして全体の学習を始めていきます。

（起立・礼）

Ｔ２：第１回，第２回と取り組まれてきた全体学習の中で，たくさんの涙が流されていった。その中で本当にたまらない思いをかみしめていくことがずっと続いております。今日の授業もそうであったわけですけど，夕べ３年生の各５会場に分かれての学習会を一つの会場に学習会の仲間が集まって２時間あまりの語り合い，話し合いを持ちました。その時もたくさんの涙がこぼれていきました。本当にたまらない思いになった２時間の時間でありました。今日は１年生，２年生を交えての板野中学校全体での全体学習ということです。今３Ｆの仲間が語ってくれたことについて，３年生，また１年生，２年生いろいろ思うことをつないでいきながら自分らにとって部落問題が何であるかってことを明らかにしながら，自分はこの問題に関わってどう生きていくのか，私にとって部落って何なんだろうか，部落差別をなくすってことが自分にどんな意味があるのだろうか，そういうことをしっかりとかみしめていきたい。そして，人間として確かな生き方をつかみ合うこれからの授業にしていきたいと思います。３Ｆの仲間の思いをうけて，みんなの中にこみ上げてきた思い，仲間にどうつながっていくか，みんなが今思う部分を出し合ってその思いを深めていきたいと思います。限られた時間を本当に大事にしたいです。いつもそうですけど，前半はどうしても重い部分があるけど，それを突き破って本当に充実した時間にしたいと思います。それでは３Ｆの授業について私は今こんなことを思ってますっていう部分を出し合いたいと思います。挙手してください。自分にとってこの学習が何であるか，この「意識の芽生え」を学んだことが自分にとって何であるかってことを３Ｆの思いにつなげて語り合いたいと思います。今流された涙，それにのせてつなげてください。

ＨＹ（女）：私が部落差別について芽生えたのは，中学校に入ってからだと思います。『あっちが部落』っていうふうな意識が芽生えて，それがやっぱり部落差別だと思います。部落っていう証拠もないし，私が部落でないって証拠もないし，やっぱり部落っていうのは自分の心の中にあるものであってそんな形のないものだと思う。のに，そんな部落っていうことに苦しめられて，道徳の時間に何人もの仲間が涙を流しています。やっぱりそういう涙を流しながら部落って語らなければいけないような社会をなくしていくのが私たちの本当の同和問題学習であって，発表してつながっていくってことが，涙を流してくれる人にこたえることだと思います。

ＴＭ（女）：私が部落差別を初めて知ったのは，小学校の時でした。その時は本とかで学習して自分には関係ないと思っていたんだけど，中学校に入学して３年になって泣きながら本音を語ってくれている人を見てそれで初めて差別を感じたと思います。

ＭＭ（女）：私が部落っていうのを知ったのは，中学校３年生になってからです。でもその前に

小学校３，４年の時に近所のおばちゃんたちが集まって『どこそこの子地区なのよ』って話してたのを聞いて，その時は『地区って何？』って思ってました。何が何だかわからなかったけど，それをずっと疑問のまま中学校に入ってやっと３年になってわかりました。

Ｔ３：今語ってくれたこと，つなげてくれますか。部落である証拠，部落でない証拠，それはどこにあるんだろうかってことを話したことがあります。みんなの先輩が涙をためて相談にきたことがある。『先生，私は同和地区でない人と結婚できたら，先生私は部落でなくなるんですか』って言ってきた女の子がおります。その時に先生は思わず言った。『お前が部落である証拠はどこにあるんだ』どこにあるんだろうか。みんなどうですか。私は同和地区の人間でないと思っている人，本当にそれがそうでないとどう証明しますか。またそうであると思っている人，それをどう証明しますか。いつも言います。みんな，みんなのじいちゃん，ばあちゃん知っている。その上のじいちゃん，ばあちゃんみんな知ってるか。またその上のじいちゃん，ばあちゃん知ってるか。それをほんとにきちんと証明できるか。そんなことをよく話します。そしてその時に言ったんです。『部落ってどこにあるんだ』って。部落ってどこにあるんだろう。ひとつここで投げかけておきたい，本当に部落ってどこにあるんだろうか。実はきのう，学習会で話し合って，みんなで考えたんですがちょっとそのことについて話してくれませんか。部落ってどこにあるんだろうか。ほんとどこにあるんだろう。

ＨＳ（男）：それは心の中にあると思います。大体の人，この中にいる人がどこにあるって聞いたらやっぱり学習会場の人たちって言う人もいると思います，はっきり言って。けどその学習会場に行っている人たちの地方にあるっていうけど，実は法律上にはそんなものはどこにもありません。部落なんてものはもうこの世にありません。部落差別はあるけど，部落の地方はもうありません。けどあるのはみんなの心の中だと思います。その地方にあるから仕方ないって思っている人もいるかもしれないけど，けどそう思っている人の心の中にあると思います。

Ｔ４：今のＨの思いどうですか。

TMM（女）：私は昨日学習会に行っていて，先生に同じことを学習会に来ていた仲間に聞かれたんだけど，その時に私は何て答えていいかすぐ反応ができなくてわかりませんでした。その後すぐに今Ｈくんが言ってくれたけど，心の中にあるって言ってくれてそれは私が気付かなかったことで，それを気付いていたっていうかそういうのがＨ君てすごいと思ったし，みんなも私と同じように一瞬迷ってしまった子が多いと思う。それを心の中にあるって昨日本当にはっとさせられてわかったから，部落差別っていうものをなくしていかなければならない一人にならなければと思う。

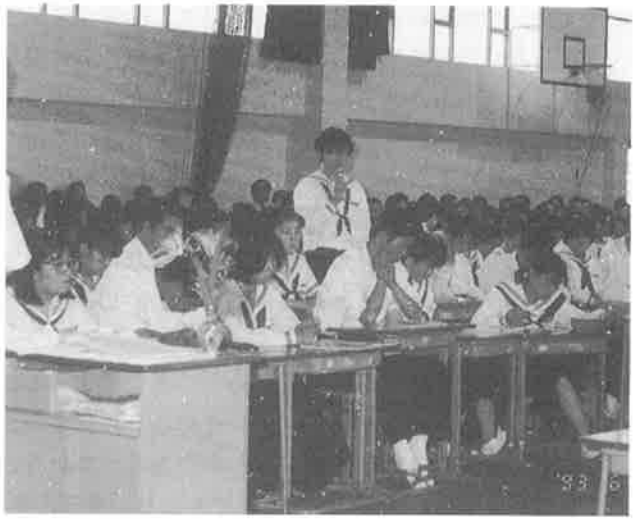
Ｔ５：部落であることを恐れたり恥ずかしがったりする，その心の底にあるその意識，『あの人部落の人だ，ここ部落だ』って意識する意識，それが我々の心の中にある。それが部落でないんだろうか。かつて先生，先生の中にどす黒い本当に部落というものにずーっと包まれてて，ひとつもそのことに胸が張れなくて，部落に生まれたことを本当に恥ずかしいとしか思わなかった，かつての自分があった。自分の中にあるそういう部落に打ち勝とうとした時に，自分自身が解放されていく，今まで本当に恥ずかしいと思っていたことがそうじゃないって変わってくる。ある人をさして『部落だ部落だ』って思ってたのがそれが本当に自分自身の中にある差別心である，自分が本当に差別しているって気付いた時に意識が変わっていく。この学習を深めていくってことは自分自身を解放していくことだと思います。誰もが本当に人のために，部落の人のためにっていう，それが本当に行き着くところは自分自身のためだっ

ていうことを本当に思います。部落差別は自分の心の中にあった，そう本当に言いきれる学習を，そういう自分に気付いていける取り組みを本当に深めていきたいと思います。今本当にみんなが思うこと，感じること，あと今何人かの人が語ってくれたことに重ねて思いをつなげていってください。３Ｆの人，繰り返し繰り返しがんばりましょう。人が言ってくれるんじゃなくて，自分に何ができるかってことを問いながらがんばっていく学習をしていきたいと思います。高校生が高校に行って絶望する，その絶望する先輩たちの思い，それはやっぱり本物になりきれてなかったっていうことです。今の自分に何ができるかってことを常に問い続けることがそういう取り組みになっていくと思います。今本当に思っていること，感じること，出し合いたいと思います。手を挙げてください。

ＫＭ（女）：私も昨日学習会行ってて，森口先生に部落ってどこにあるかっていうことを聞かれて，Ｔさんと一緒でいくら考えても部落ってどこにあるんだろうってわからなくって，そんな時にＨ君が部落っていうのは人の心の中にあるって言ってくれた時にああそうだったのか，って思って，そんなことを教えてくれたＨ君にすごく感謝したいし，そこにいてよかったなって思いました。

Ｔ６：たくさんの仲間が集っています。１年，２年の人，この問題に関わって，私はぼくはこんなこと思ってる，これがぼくの本当の気持ちなんだ，こんな悔しい思いをしてきた，こんな思いになってきた，っていうものを出し合いたいです。挙手してください。

FKM（女）：私も昨日学習会に行っていて森口先生が『部落ってどこにあるんだ』って質問した時，ＴさんやＫさんと同じで迷いました。Ｈ君が心の中にあるって言った時，そうなんだって思いました。人の心の中に部落差別があるって私も思います。心の中にずっとここの地域は部落地域とか植え付けられて，ここの人を見下していたんだと思います。私も昨日Ｈ君が言ってくれなかったら気付いていなかったと思います。



MAM（女）：昨日学習会に行って森口先生が問いかけた時に，私はすぐ心の中にあると思ったけど，ある子が『ここにある』と言った時にそうかなって迷ったけど，あとでＨ君が『心の中にある』って言ってくれたから，やっぱりそうだなって納得しました。

MOM（女）：私は今まだ同和問題学習をするのがすごくつらいです。今，学習をしている時に先生に当てられて意見を言うのもすごくつらいです。だから，今のままの私はきっと高校行った時に流されて『板中出身だ』というのが言えなくなると思うから，これからもっともっと学習してがんばりたいです。

Ｔ７：ありがとう。

ＹＥ（女）：大体今発表してくれた人がほとんど同じ小学校だったです。ずっと一緒の学校に行ってて部落とか全然関係なしにやってきたけど，中学校になってみんな部落ですとか言ってくれて何かすごくうれしかったです。

FJM（女）：私も前に森口先生がクラスで道徳をしている時に『部落ってどこにあるんだ』って言われて，私はどこかわからなかったけど，先生が『部落は人間の心の中にある』って言って初めはそうなのかなって思ったけどやっぱりよく考えてみたらその人が部落だとか部落でないとか証拠なんてどこにもないし，やっぱり心の中でこの人は部落だと思って差別していたんだと思います。私は中学校に入って部落問題を真剣に考えだしたと思います。３年生になってもっと考えだしたと思います。だからこれからもみんな発表してくれるんだから，その思いに応えていきたいと思います。

Ｔ８：部落という言葉を聞いて心が重くなる。そのことを語り出したら涙があふれてくる。そんな思いにしていく自分の中にある部落って何だろうか。そのことをきれいに洗う，きちっと受けとめていく，そういう学習をそういう思いをつなげていきたいと思います。今の仲間の思いにどうかほんとにつなげてください。今発表した子が本当に言って良かったと言える時間にみんなでしていきたいです。挙手してください。

ＹＹ（女）：今森口先生が『部落ってどこにある』って言って，私も心の中にあるっては思ったけど自分の心の一体どこにあるかっていうんはよくわからなくって，けど中１のころだったらそうやって聞かれてもたぶん心にあるとは思わずにさっきＨ君が言っていたみたいに，学習会のある所ってそういう地方にあるって思っている人がいるって言ってたけど，たぶんそのうちの一人だったと思う。

ＦＳ（女）：私も昨日学習会に行ってたけど，先生に問いかけられた時にみんなと同じようにやっぱり心の中に部落があるっていうことに気がつかなかって，その時Ｈ君が心の中に部落があるって言ってくれて，自分がはっとしたように思ってあそこにいてよかったと思いました。

ＫＮ（女）：私も昨日学習会に行ってて，部落っていうのは私も心の中にあるんだなって思ってました。昨日部落が心の中にあるっていうのに最初に気付かなかったっていうか，迷いが一瞬でもあった人はその迷いが心の中にある部落ってものだと思いました。でも泣いてでも最後まで自分の意見を発表してくれる仲間がいる限り，私たちは第三者的立場になって自分の意見を発表するんじゃなくて，人の意見を聞くだけの立場になってはいけないと思いました。

ＯＫ（女）：昨日学習会に行ってて，森口先生が聞いた時にそうやってみんなに問いかけた時，はっきり言って自分もわかりませんでした。でもＨ君が心の中にあるって言った時になんかそうだなあって思ったし，自分が心の中にあるっていうことに気付かなかったってことにすごく悔しかったです。

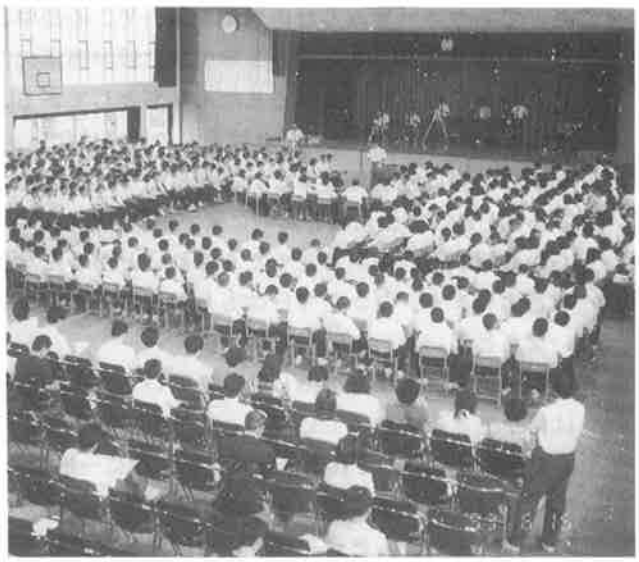
Ｔ９：自分の意志で差別してるということですよ，心の中にあるっていうことはね。自分自身が差別してるということですよ。そのことに気がつかないんですよ。人がしている，差別があるからって。その差別は自分の中にあるっていうこと。自分自身がほんとに差別してるということになかなか気づかないんですよね。今ほんとに学習会の仲間ががんばってくれたこと，その思いをほんとに語ってくれたこと，実はこの取り組み４年目になるけど，学習会のことがこれだけほんとに語られたことは今までなかったんです。今ほんとに仲間が語ってくれたこと，みんなどう聞いたですか，どう受けとめたですか。そのほんとに自分の一番苦しい部分を語ってくれた仲間にみんなはどうつながっていこうとしますか。今までほんとにいろんな場面で涙を流してきた人もいるだろう。その涙を本物の，みんな自身が本当に生きていく人間として生きていく差別を克服していく生き方にね，つながっていくそういうものにしていきたい。今語ってくれた思い，訴えてくれた思い，どう聞いたですか。つなげてほしいと思います。

ＭＨ（女）：私は中学校に入って２年の時まで部落は本当に形としてあるものだと思っていました。でも今さっきみんなの意見を聞いて，心の中にあるんだって思いました。私が部落が形としてあると思ったのは，１年の時に親が部落のこととかちょっと話したことがあるんだけど，親から話を聞いているとなんか形としてあるようなものって受けとめていました。今まで私は親から『あっちの子とは遊んではいけない』とかそんなこと一言も聞いたこともなかったから，親は差別者じゃないんだってずっと思っていました。つい最近までずっとそう思っていました。だから親と真剣に家で部落差別のことについて話したことは一度もありません。だから親がもし差別者だったらこわいとかそんな気がしたからなんか勇気が出せなかったんだと思います。だから今日はもしかしたら言えないかもしれないけど，親と一度話せたらいいなあと思いました。

ＡＳ（女）：私は先輩方の話し合いを聞いて，まず自分は今何ができるのか差別をなくすためには何ができるのかっていうことを考えてみると，今私がしゃべることによってなくなるんだって思いました。それで先輩達があんなに一生懸命がんばってるのに，私はここで悠長に座ってていいのかなって思いました。それで私は自分のために差別をなくすため，自分のためにこの発表をしました。さっき，吉成先生が最後の話し合いで『闘えよ』って先輩方に言ったら，先輩方は『はい』とか『うん』てうなずいたんです。それで私はああ真剣に考えてるって私も真剣に考えなければ絶対なくならないし，自分自身に負けてたまるものかって思って発表しました。これからも私はどんどん発表していきたいと思います。

Ｔ10：この授業っていうのはほんとに部落差別をなくしていく，闘いなんです。こういうふうに全部のクラスの仲間がここに集って授業する意味っていうのはこれは実はみんなが今まで受けてきた道徳の授業や同和問題の学習っていうものが大概が資料を読む，その資料を読んだ感想を書いて終わってしまう。ほとんど話し合うということが全くない。中学生はものを言わない，話し合うということはないという中で話し合いを全くさせない，ただに感想を書け，思うことを書けっていう形で授業が流れていく。その中で本当に苦しい思いをしている子どもたちが仲間が胸を張れない，悔しい思いをする，切ない思いをしていく，そういう道徳の時間しかなかった，同和問題の学習しかなかった。そういう中身をそれぞれのクラスでほんとに不十分な中身を全体でがんばる中で確かなものにしていきたい，本当の思いが語れた喜び，本当の思いを聞けた喜びをみんなでつかみ合いたい。そういう中でこの取り組みが始まったんです。なかなかこの大勢の前でほんとの思いを語ることは難しい。しかし今３Ｆの仲間がやってくれた，３年生の仲間そして今２年生の子がほんとに語ってくれた。そういう仲間につながっていく，私はこんなこと思ってる，ぼくはこんなこと思ってる，こんなふうに感じてる，そして自分の中にある部落に気付く，差別に気付く，そして自分自身を解放していくことだと思います。人のためとか部落の人のためとか，そんなことを言ってる間は一つも本物になっていかない。ほんとに見せかけでしかないわけですね。自分自身が差別してきたことに気付かない，現に差別していることに気付かない，部落の人を部落と見るというそういう意識がどれだけ部落の仲間を苦しめているかってことに気付かない。自分自身の中にあるどろどろしたものを洗い続けていく。それがこの学習の意味だと思います。みんなが思いを語ることの意味だと思います。ほんとにつながりたい，語り合いたいと思います。いろいろ出たことについてまだほんとに語れてない人，手を挙げて思いをつなげてみてください。そして今日ほんとにこの授業に参加してよかったとこの暑い中がんばってよかったと思える時間にしたいと思います。限られた時間を大事にしたいです。挙手してください。

ＫＳ（男）：さっきＨ君が『部落は心の中にある』と言っていて，自分以下を求める心と似ているなと思いました。



ＳＡ（男）：ぼくの家でも友達の話がのぼりました。そしてばあちゃんが『あそこの方面の子とはあまり関わらないほうがいいよ』と言った時，ぼくはすごく頭に血が昇ってすっごく腹がたちました。そして反抗しました。けどまた一方的に言われてなんか黙らされました。その時はすごく悔しくて悔しくて，悔し涙を流しました。

Ｔ11：Ｓの悔しい思いを受けてつないでくださいよ。つないでくださいよ。

ＡＹ（女）：私は今日の朝，お母さんに部落差別についてどう思うか聞きました。（涙）私が中１の時に母は私の友達のことについて差別的な発言をしたので，私は今日の朝聞くのがすごく恐かったです。それでお母さんに部落差別について聞いたら，母は『私は差別なんかしていないよ』って言われました。母は私が中１の時に差別的なことを言ったことをすっかり忘れていて，私はそれにすごく腹が立っていやになりました。でも私が腹が立って泣いていると，母が仕事に行く時に『帰って来たらゆっくり話そうな』と言ってくれたので今日は帰ってゆっくり話し合いたいと思います。

ＩＴ（男）：部落差別は闘いだと思います。やっぱりみんなでかち取っていかなければいけないと思うのでみんな続けてほしいと思います。

Ｔ12：Ａの思いにほんまに続けていこうよな。

ＯＴ（女）：部落とか部落でないっていう証拠はどこにもないって私も思います。みんな同じ仲間としていろんなことに対してがんばっていけたらって思うし，自分ももっと真剣にがんばらないといけないなって思います。

T.阿部：先生もね小さい時から親とよく喧嘩しました。喧嘩の連続です。全然わかってくれないから家を飛び出したことも何回もあります。これは大人になってからですが，すっごくきつかったですね。それと家族がばらばらになっていきます。先生の家はそうでした。兄弟が４人いるんですが，兄弟がばらばらになっていきます。先生は差別がすっごく憎いです。絶対許せんと思います。もちろん親も，その時はねものすごい親に対して腹を立ててましたが，そうじゃないと，親をここまで追い込んだ差別が憎いと先生は感じました。いつも思うんですがこうやってみんなが涙を流さなければいかんのかといつも思います。先生方も意見をちゃんと言ってほしいなとそう思いました。

T.吉成：なんで涙流さなあかんの。しゃべれないのでしょう。このことが家で話ができないんでしょう。しゃべろうと思うとつっかえるんでしょう。仮に声に出ても親がそこでシャットアウトしてしまうんでしょう。言わしてくれないんでしょう。話し合いにならないんでしょう。なんですかそれは‥‥‥、なんでですか。普通にしゃべれるのだったら涙なんか流さなくていいはずでしょう。なんでしゃべれないんですか。考えてますか。眠ってませんか。みんな

の気持ちは眠ってませんか。３Ｆのみんな，不完全燃焼しとる奴，きちんと完全燃焼しとけよ。それと本当にね，学年越えて言ってください。それとすみません，見に来られてる皆さん言ってやってください。いろんなことを話してやってください。子ども達がこれだけがんばってるんです。見に来てくれて本当にありがたいと思ってます。子ども達に話してやってください。生の声を聞かせてあげてください。

Ｔ13：授業を公開した意味はそういう意味があるかと思います。部落には部落である歴史はない。差別を受けてきてほんとに劣悪な状態に追い込まれてきた歴史はありますよね。差別がそういうことを生んできたってことですよね。あなた達が差別してほんとに部落の人達がしんどい状態に追い込まれていって，またより差別されていく状態にされてきた歴史はありますよね。でもそれが部落である，ほんとにそれが部落であったからそうだっていう歴史はないですよね。差別を受けて差別によってそういうふうに追い込まれてきた歴史はありますよね。どうかほんとにその涙の底にあるものを，なんで涙が出るか，そして自分はどうほんとにその仲間に連帯しがんばっていくのかっていうことを出し合いたい，語り合いたい，本当につながり合いたい，絶対に切れないきずなをつかみ合いたいと思います。つないでください。

ＴＭ（女）：今阿部先生や吉成先生が言ってくれたことで，私は中学１年生の時，私から見た先生っていうのはわかってることを教えるだけですごく楽な立場かなあって思ってたけど，ここの中学校の先生みんな昨日の学習会とかに行ってても私ら守ってくれてて，それとは反対に昨日吉成先生が手紙を紹介してくれた文がありました。（涙）高校の先生が同和問題の作文で『国語の点数に入るからちゃんと書いとけよ』って言ったことです。何が国語の点数って思いました。私らの気持ちをわかってるようなふりしてわかってくれてないようなそんな先生がまだいるっていうことに私はすごく腹がたちました。けど私らには見守ってくれる先生やがいっぱいいます。そんな中学校に来れて私は本当にうれしいと思いました。

Ｔ14：Ｔの思いを受けていこう。

ＨＹ（女）：私はこの闘いは絶対に負けない闘いだと思います。Ａさんもお母さんと闘っても絶対Ａさんが勝つと思います。Ｔさんとか学習会に行っている人の思いを受けてみんなもっと自分の思いを言っていってほしいと思います。それがＴさんとか泣いたりして一生懸命発表している人にこたえることだと思います。

Ｔ15：雨に負けるな。

ＹＥ（女）：今雨が降っています。これは差別されている人の涙だと思います。みなさん発表してください。

MOＭ（女）：今Ｔさんが涙ながらに語ってくれたことは私はすごくうれしかったです。これからどんどんみんなにも発表してほしいし，発表するために泣かなきゃいけないっていうのはすごく悔しいから勇気を持ってがんばっていきたいです。

MAＭ（女）：今涙を流して語ってくれた人はすごくうれしいんだけど，涙を流したらそこで負けになると思うから，みんな泣かずに発表したほうがいいと思います。

卒業生：今日学校をさぼってこの全体学習を見に来ました。ずっと５時間目から見ているけど，ぼくたちがしていたような全体学習ではなく，また違うような全体学習が見られました。学習会のことなど，いろいろぼくたちでは触れなかったような問題にも触れてくれたし見ているほうもぼくたち良かったと思います。ぼくは高１なんですけど，去年この板中を卒業して高校に入って部落問題について考えていました。一応部落問題の先生っていう人はいるんですけど生徒ののりがないっていうかやる気がないんです。逆に板中からは１０何人しか行っ

ていません。全体学習はあんまり他の学校ではなかったようなのでなんか一人になった気分になります。自分の思うようなことも言えないし，勉強していてもみんななんかほかのことをして一人取り残されたような感じです。今から思えばいくらか中学校の時の方がよかったような気がします。全体学習をしようとぼくが先生に言ったけどみんなする気がなくてそんなことする暇があったら勉強をしろと言われるぐらいです。今こんな中で全体学習をしているみんなはすごく幸せだと思うし，ぼくは一人取り残された気分です。これからもみんな自分の素直な気持ちを言えるようになってこの板中の全体学習を続けてほしいです。

T16：自分に何ができるかということをみんなで問いながらね，本当にがんばっていきたい，今の自分に何ができるかってこと，そのことを自分自身に問いながらねがんばっていこう。

ＫＮ（女）：今日はもっと１，２年生の人に発表してほしかったです。私たちが１，２年生の時もそうだったんだけど，なんか先輩たちに遠慮っていうのがあって先輩たちの前で自分をさらけ出すのが恐かって私たちの時はできなかったけど，そういう面では遠慮のない関係をつくっていきたいです。私たちは今３年生の中でも発表できない人もいるけど，高校に入って先生とか上の人たちにもつぶされないようにがんばれるようになるためにみんなでがんばっていかなければならない，反抗し続けていかなければならないと思います。

ＨＭ（男）：ぼくがこの板野に引っ越してきた時に少しして親が『部落ってどこらへんにあるの』って聞きました。その時ぼくは『知らない』って言っただけで何も反抗しなかったけど今思うとその時反抗して『どうしてそんなことをするんな』って言ったほうがよかったと思いました。

永井議長：私解放運動をしておる解放同盟の永井でございます。何回か見せてもらったんですけど今日の全体学習を見てほんとに自分も何か言わなければいけないなあという気持ちを生徒自身の発表の中から湧かされました。私は当年とって６５才です。その生きてくる中であらゆる差別を体験しております。しかしいかに自分が悔しくても，少なくとも私たちの時代にはこういう同和教育とかそういう教育がございません。そういう中に先ほど授業にもありましたように噂から人の噂，噂が噂で少なくとも部落というものを，イメージというものを皆さん方のような小さい小学校や中学校やの時代から意識するかしないにかかわらず積み重ねられていく。そして部落に何事かあったら『あれみい，それみい』ということが付け添えられる。それで部落というもののイメージがそれにつながっていく。そのことがいわゆる人が人を差別するということ，そのことがいかにつまらないものであるか。私が解放運動した時に私が部落差別を受ける立場でありながら，身障者やまた自分より経済的に貧しい人を見た時に必ずしも自分がその人を人間として見ておったか，ということを私は解放運動の中で学ばされました。やはり差別される立場でありながら自分の心の中にも差別している。自分よりも以下のものをつくっておるんだなあ，これが差別だ，ということをつくづくと私は運動の中で学ばされました。少なくともそのことが今はみなさんが交通地獄といわれている交通戦争の中でいつ障害を受けるかわかりません。その障害を受けた時にはそういう差別というものをこの世に残しておけば自分が障害者として人間であることを人間でないという差別思想が必ずしも今でのように同和教育がない時代のようにいわゆる強行に差別はきます。それには人権なり生命なりが奪われていく，部落の人だけでなしにそういう中で共に人間として生きていきたい，ということをこういう学習会を通じてもう一層もう一層皆さん方は一生懸命にがんばって先生の教えに学んで，人権の命の重さというものを学んでほしいと思います。

ＫＫ（女）：Ｔ先輩とかＴ先輩の同級生の人とかのように，私も一生懸命になりたいです。私の

兄はＴ先輩の同級生だけど，人を見て同じ人間なのに差別をしてしまう立場になっています。私もいつかは差別してしまうかもしれないけれど，Ｔ先輩のようになりたいです。

卒業生：ぼくも今年中学校を卒業して今日久しぶりに板中の全体学習を見に来たんですけど，ぼくたちががんばってやってきた部落問題をここまでがんばって取り組んでくれているということをとてもうれしく思います。つらい気持ちはわかりますが泣かないでがんばって発言してもらえたらと思います。差別する人をなくすのではなく，その人の差別意識をなくすということであってその人自体を排除してしまうわけではありません。差別される人は差別されないように自分で努力して差別に負けない力でがんばってもらいたいと思います。先生も生徒に負けないように先生が逃げてしまわないように先生もがんばってもらいたいと思うし，ぼくもこれからがんばっていこうと思っています。ここまで生徒ががんばっている中，ぼくたちが黙っているのもなんなので発表させてもらったのですが，この中で誰でもいいから生徒たちに一言アドバイスをしてくれたらと思います。これからも差別に負けないようにがんばってもらいたいと思います。

ＥＡ（男）：今意見を言わなかったらなかなかこれからも言えなくなると思います。これだけがんばって全体学習をしなければならないのは，ぼくらが差別者だったからだったと思います。みんながんばってやっていかないといけないので次からじゃなく今から手を挙げて発表してほしいと思います。

ＮＫ（女）：差別がない世の中なんてほんとはごく当たり前のはずなんだけど，それができてなくて今私たちは闘っています。でもみんなと幸せになるために闘うっていうことは絶対おかしいような気がするけど，泣き寝入りみたいなことはできないので闘うしかないと思います。

ＴＤＭ（女）：今自分にできることはみんなの前で自分の思いをわかってもらってみんなと一緒に考えることしかできないけど，今自分にできることを一生懸命して部落差別とかで泣く子がいないようにしたいです。

ＴＨ（女）：さっきの時間吉成先生がこの学習は先生や生徒は関係ない，一人の人間として，と言った時に本当にそうだと思いました。私も一人の人間として同和問題の学習にがんばっていきたいです。

卒業生：今全体学習を見さしてもらってるんだけど，久しぶりに生の全体学習を見れてすごくどきどきしています。学校が終わって今日吉成先生に全体学習があるというのを聞いていたので，すっ飛んで来たんですけどすっ飛んで来ただけの甲斐があったと思います。高校は本当に勉強ばっかりで全体学習や他の中学校はほんとにしてなくて，部落のことも知らないとか言う子もすごくいて本当に勉強ばかりで，この前も部落問題の学習があったんだけど，板中の子でも発表しなくって私ともう一人の子だけが発表して中学校のあれは一体何だったんだろうなあってすごく苦しかったです。今みんながんばって発表してるけど高校になったらほとんど知らない人ばっかりだと思います。だから今高校で一人になっても胸を張って堂々と自分の意見を言えるような力を今全体学習で育ててほしいと思います。

ＨＫ（男）：ぼくは部落の人間だとずっと思ってるんだけど部落ということがよく分かりません。それは小学校の時からずっと勉強してるんだけど，部落差別されていることが，部落差別されているということもまだよく知らないんだけど，部落差別されたとしても同じ人間なんだし，変わった面もないし別にどうこう言われる筋合いはないと思います。

ＨＳ（男）：お母さん方にお願いがあります。息子とか娘には学習会に入ったら，行きたいとか言ったら大人になったら差別されるっていうけど，それが本当なら自分がされてもしも大人になって差別されるのだったら，ぼくたち部落の人間がされるんだから自分が昔されたこと

について話してください。資料があってもまだ大人になってないから経験したことないから資料の中だけではわからないこともあります。今、今日来ているお母さん方は自分の息子は関係ないと思って来てるんじゃないし自分の息子に同じ思いをさせたくないと思って来てるんでしょ？だったら自分の経験とかを話してください。経験じゃなくてもじぶんが差別したことでもいいです。ここにいる人たち子どもたちは今つまりお母さんを売ってるってことなんですよ。お母さんが差別したとか言っている。育ててくれたお母さんを売ってるってことなんですよ。だったら世間のことは気にせず，お母さんたちも自分が差別したことを言ってほしいです。それを資料にしたいと思います。

T17：今日の３Ｆの学習がそうだったと思うんですけど自分の本当のところをごまかして隠してそれに覆いをして『差別してはいけません』『差別をなくしましょう』と言ったってそれは本物になっていかないですよね。やっぱり初めて部落というものを認識した時に部落差別を知った時に最初から『部落差別をなくしてやろう』とか『部落に生まれたことを誇りに思う』とかそういったものではやっぱりなかったはずですよね。大切なことはそういう中からどうはい上がりどう立ち上がり自分自身を変えていくか，ということが人間として一番大事なことだと思います。そういうことを学び合う確かめ合う，そしてより確かな生き方を営んでいくのが今してる全体学習の意味だと思います。自分の中にある部落というこだわり，部落差別とのつながりの中に生きる，それをどう解放していくか。それはやっぱり自分自身との闘いだと思う。そのことを放っておいて部落の人のためにとか差別されとる人のためにとかいう。本当にそれは他人ごとの気持ちにしかなっていかない。自分にとってこれはどう関わっているのか。自分にとってこれは何なのか。そのことをしっかりと捉えていく。これがやっぱり生徒も教師も親もない，人間としてやっぱりそのことを考えられるってことがこの学習のスタートだと思います。そのことをしっかり捉えないから同和教育というものが上滑りな表面的なものになっていると思うんです。今，Ｈが訴えてくれたこと本当にしっかりと取り組んでいきたい。板中の仲間のために捉えていきたい。時間がきてます。最後このことだけは仲間の思いにつなげておきたいという人，その人の発言でこの授業を終わりたいと思います。いろいろ語ってくれた３Ｆの思い，学校全体の授業で語られた思い，その思いに寄せて今ぼくは私はこんなことを思っています，こんなことを感じています，こんなことだけは言っておきたい，ということを出し切ってこの時間を学校全体の同和問題学習のしめくくりにしたいと思います。仲間の思いに向けてまだ語れてない人，いっぱい思いをもっている人，繰り返しこのことだけはがんばりたいということを出し合いたいと思います。最後です。挙手してください。

山川町教員：５月に山川町の学習会の開講式の時に森口先生に講演に来ていただいて今日のことをお聞きしました。２時間みんなの発表を聞いてとてもやっぱり一言言わないと後悔すると思って言わせてもらいます。この２時間ここにおらしてもらってみんなの真剣に取り組んでいる気持ちがひしひしと伝わってきて地元に帰っても学習会の子どもたちにこんな力強い仲間がたくさんいるってことを伝えていきたいと思います。地区のお母さん方はいつ自分の子どもたちに社会的立場を教えたらいいのかっていうことを常に悩んでいます。そのことについて話し合いをするのですが，ここで，授業の中で聞かしてもらったように地区外の子どもが小学校２年生とか３年生とかの時分にマイナスイメージとして部落というものを知らされてきている，ということをやっぱりしっかりとらえて地区のお母さん方には，自分の子どもたちよりも周りの方が先に知ってるんだっていうことをきちんと話していって，つらいだろうけど苦しいだろうけど子どもたちに語っていかなければいけないんじゃないかってことを

話していきたいと思います。また私自身としても職場とかいろんな中で過ごしていく中でさっき吉成先生が言われた言葉で『なあなあで過ごしてはいけない』ということがすごく胸につきささって，これからはなあなあで済まさずにやっていこうと改めて思いました。涙を流さないでって言われたけど，涙にもいろいろあると思うんです。つらい，悲しい涙もあると思うけど感動する涙とか，私は喜怒哀楽が激しいので笑っても怒っても涙が出るんです。だから，怒りの涙を流していけるような怒りを持ってやっていけるようにしていきたいです。今日はありがとうございました。

卒業生：さっきも友達が言ったけど，高校では本当に部落問題の授業が少なくて，今までに１，２時間ぐらいしかやってないと思います。アンケートの調査みたいなのがあって，結果が出てプリントが配られたんだけど，親から言われたら部落の友達とつきあいをやめるとかいう人がいて，私はこの中学校で学んできたのでそういうことが本当にあるんだなあと思ってショックでした。高校に入ったら，つきあいをやめると書いた人たちは，授業が本当に少なくて，本当のことを知る機会がないと思うから，一生そういう考えでいってしまうかもしれないと思うけど，みんなはこの中学校で精一杯考えて自分の意見を言ったりして自分の考えをちゃんと持って自分の生き方をちゃんと決めてほしいなと思います。

助言者：今日ここへ来させていただいて，私自身みなさん方が非常に部落解放に熱い思いを語っていく中から，ここで板野中学校のみなさんがともした火を私自身がどうできるかって考えた場合，今私は県の教育委員会の同和教育振興課っていう所におります。私にできること，しなければならないことはみなさん方がともしてくれた熱い思いを部落解放への熱い願いを私自身，これから今の立場でやっていく，その中において，今日ここにお越しくださっている先生方，帰られたら必ず自分の学校で板野中学校の生徒の熱い思いをともして自分の学校の子どもと板野の子どもたちが連帯していく，そういう取り組みをいただけたら，と思います。私は今日ここにおいでてない多くの学校の先生方に，この子どもたち熱い思いを伝えていきたいと思います。みなさん，共にがんばっていくっていう仲間をこれからもっともっと増やしていきたい，そういう思いでいっぱいです。この後参会された先生方は研究会がありますが，どうぞ時間の許す限り残って自分の子どもをどうしていくか，そして自分が人間としてこの問題にどう正面から向き合って考え，そして取り組んでいくか，同和教育は部落差別の解決を目指して行われる教育，そしてその中において全ての差別をなくしていく教育じゃありませんか。今目の前にいる子どもたちの中で，ここで学習会への熱い思いを語ってくれた子どもたちにとっては部落差別が一番の自分と向き合った問題です。しかしそれぞれの学校において，今日ここでともされた火をそれぞれの学校の一日の中においてあるべき問題と向き合ってがんばっていってもらいたいと思います。私自身も今まで本当に自分自身がこの問題と向き合う中から，ここで学ばせていただいた火を今日ここを出る時からもう一度自分自身に問い直していきたいと思います。生徒のみなさん，ありがとうございました。

北島中：５時間目からずっと見せてもらってます。同振課の森口先生の話もうかがい，私もこの場で発言しなければいけない気持ちになりました。板野中学校のみなさんの熱い思いを北島中学校に持ち帰って北島中学校の中でみなさんの思いを訴え，共に学んでいかなければと。そして一緒に闘っていける生徒を作っていかなければならないと思いました。北島には同和地区がないと言われていますが，心の中に部落はあります。『部落はどこにあるんだ』『心の中にある』という意見が出ていましたが，その通りだと思います。心にある部落を取り払うためにも，みなさんの思いを持ち帰って北島中学校で心の中にある部落を取り除くために我々が教師として，一丸となってやっていこうという気持ちになりました。それから板野中

学校の卒業生の高校生の先輩方が言っていましたが，中学校を卒業して高校に進学して，あるいは就職して，職場で共に闘っていける生徒を作っていかなければいけないなとそういう思いでいっぱいです。板野で一生懸命学んだ生徒をつぶさないためにも，我々の学校でも板野の生徒を支え，共に闘っていける生徒を一人でも多く作っていかなければいけないと思います。今日はたくさんの生徒のみなさんや先生のみなさんから学ばせてもらいました。

北島中：卒業生の人が高校に行って苦労してるっていう話を聞いて，誰がそういう思いをさせてるのかなっていう気持ちになりました。もしかしたら，いやきっと私自身がこの子らを苦労せせざるを得ない状況に追い込んでいっているんではないか，と思いました。板野でこれだけがんばっている子をうちの北島でも支えられるような生徒を育てていきたい，つくづく今日はそう感じました。昨日の学習会に行かせていただいて，そこである女の子が言っていました。差別はしてはいけないものではなくて，なくさなければいけないものだ，ほんとにその通りだと思います。なくしていかなければいけないものだ，絶対になくなると。人間はもともとやりたいと思ったことは絶対にできる，それが人間だと教えてもらいました。人間になるために北島の子も一生懸命がんばってます。絶対にみんなを見てそれだけで終わるような人間を作りたくない。こうして私が発表できるのも，みんなも意見を言ってましたが，私の後ろに３６人いるからです。みんなも友達がいるから発表できたんだと思います。一緒だと思います。こうして一人ひとりががんばっていける，それはすごくすばらしいと思います。明日また帰ってうちのクラスの３６人に話をしてやりたいです。一緒にがんばりましょう。

徳商：今日初めて全体学習に参加させてもらいました。徳商の一年生は４４０人いるのですがその中に一人非常に輝いている女の子がおります。今の中学２年，３年の人たちは知ってると思うのですが，３月の卒業式に答辞を読んだ女の子です。その内容は，『差別と闘う炎を燃やすように在校生のみなさんにお願いします』と言って中学校を去った女の子です。今日授業を見せていただいて，明日学校に帰ったらＡさん，Ａ子さんに必ず言いたいのですが，『あなたが後輩に託したお願い，炎は後輩が一生懸命，激しく燃やしています，きちんとがんばって燃やしています』と言いたいと思います。高校に行けばつぶされるという話がありましたが，後輩もがんばっていますからＡ子さんも高校でつぶされないように私と一緒にがんばろうと言っておきます。

Ｔ18：３Ｆの仲間が５時間目にがんばってくれた授業がこれだけのすばらしい全体学習にしてくれました。さっき３Ｆのみんなが繰り返し繰り返し語ってくれたことをしっかり受けとめていきたい。先生方の中には私のクラスとは違う，なかなか手が挙がらない，発表もないという現状はあると思います。全体学習っていうのは３Ｆのがんばりを全部のクラスのがんばりにしていくためのものだと思います。そのクラスで私に何ができるのか，ぼくに何ができるのか，３Ｆでのがんばり，手を挙げて語ってくれた仲間のがんばりにこたえていくことが大切だと思います。本当に差別をなくしていく取り組みを確かなものにしていきたい。この授業は続けることにこそ意味があります。熱い炎を確かなものにしてがんばっていく，そういうつながりを大切にしたい，そして本当に出会えてよかったと，がんばってよかったという関係を確かなものにしていきたいと思います。これは差別をなくしていくためのほんとうの闘いだと思います。みんながんばったこの２時間余り，その炎を受けて多くの先生が絶対にがんばってくれる，そのことをみんなに約束して授業を終わりたいと思います。

1993年度板野町同和教育研究大会

第３回全体学習・研究協議の記録

1993年６月15日（木）

授業者吉成：この授業に対して自分自身大冒険のつもりで取り組もうとしました。授業について従来通り学習プリントは作りました。しかし，内容は自分が今まで作ってきたものとはかなり違うものを作ることになりました。「意識の芽生え」この資料を追うようなものでなく，それを度外視して作りたいと思うようになりました。いかに生徒たちが自分たちの生活の中でどれだけ今まで気が付かなかった部分に目を向けることができるか，どこまで実践ができるかを求めました。

この資料自体を勉強した時間は１時間もなかったと思います。それ以外は生徒自身の生活を振り返りました。生徒の顔は，早く自分たちのことを言わせてくれ，という表情だったからです。資料ばっかりするなという顔つきでした。そこで、いつ部落差別と出会ったかということを，まず考えさせました。考えれば考えるほどいつだったのかが変わってくる子がいました。それをどう思っているのか，誰が伝えていったのかを考えていかせたかったんです。

授業方法は漠然としたもので，自分の中には何のシナリオもありませんでした。ぶっつけ本番でしたが，今はあの子たちを信じていてよかったと思っています。

授業者森口：３年生の全体学習は，これが３回目になります。１年，２年が入るのは初めてです。今吉成先生が話した授業構想は，１回目，２回目の全体学習がそうだったため，こういう形になりました。部落問題に関わる資料を読んで本当の生徒の思いが語られる，そしてそれに教師がつなげていくのではなく，クラスの仲間がつなげていく。それがこの学習のよろこびであり，確かな生き方につながっていくんだと思います。

スタートは５月の学習会での部落問題学習でした。部落の子どもらが自らの思いを語り合いました。それが次の日の全体学習にそのまま出てきました。自分の中にある部落，部落を恥ずかしがっていた自分，部落を差別することが当たり前であるという意識。自分自身との闘いであるということがわかってくる。部落の人を差別しなければ自分が部落の人間だと思われる，そういう差別心がわかってくる。本当の思いを語った時に仲間がつなげてくれる。そしてつなげてくれたら今度は自分が発表するんだという姿勢，本当のことが語り合えるそういうつながりがこの授業を成立させてきたんです。

３年になったよろこびとは，思いを語り合えるよろこびであると何人かが書いてきています。『３年になって自分のことを口にだせるようになった。そして仲間が続いてこたえてくれた。たまらなくうれしかった』と。

昨日の学習会，ある会場に他の会場の子らも寄せて学習をしました。２０名ほどが学習する中で熱い熱い思いが語られていきました。たまらない思いが出てくる。なんでこの子らがこんな思いをしなければならないのか。そのことを一番にわかってもらいたい。あの子らが涙して語ったものは本当の思いだった，と。昨日は北島の先生にも見に来ないか，ということでおいでていただけました。そのエネルギーって一体何だろうか。うちの職員が全員来ないのはなぜだろうか，と考えさせられました。教師の姿勢，生きざまが子どもを立ち上がらせていくんだと思います。『今日あの先生関係ないのに来てくれている』そういう姿勢が学習会の子どもたちの大きなよろこびになっているように思います。我々が一番しんどい思いをしなければ，と思います。そうしなければこの取り組みは絶対に本物になっていかない。子どもらには『語れ，語れ』って言う。けど我々が揺れてきた思い，しんどい部分，克服していかなければいけない思い，苦しい部分を隠していってなんで子どもらだけでがんばれるはずがあるのか。そういう思いを語り合うことによって我々の取り組みが年々深まってきたんだと思います。今年も回を重ねるごとに子どもたちの思いを語ることが深まっている。昨

日の学習会は涙，涙でした。何があの子らをそこまで泣かせるのか。本当の先生の思いが聞きたい，先生は私らのことどう思ってるのか聞きたい。けどなかなか先生を信用しきれない。親からは言われている。『先生だって部落差別してるのよ。部落差別なんてなくならないんだから学習会行ってもしかたない。行っても周りの人間がお前が部落の人間だって余計差別するだけだ。絶対に学習会に行くな』って言われている。そういう子どもが学習会に来てがんばろうとしている。その子が『先生は本物だろうか』『あの先生はわかってくれるだろうか』って揺れる思いの中で涙を流しながら語ってくれる。その思いに我々がどうこたえていくか，どうがんばっていくか。そのことを日々の取り組みの中で問い続けていかなければいけないんだと思います。

※

「今日学習会に行きました。部落問題学習の日でした。５会場の子全員ではないけど，南会場に集まって語り合いました。言いたいこと，書きたいことがいっぱいあります。先生が『部落って何だ。部落って一体どこにあるんだ』って私たちに言った時，私は考えてしまいました。すぐに反応することができませんでした。Ｈ君が『心の中にあると思う』と言ってくれた時納得させられたというか，しました。私が気がつかなかったこと。Ｈ君がそう言ってくれた時，みんなハッとしたと思う。

二つ目はＨＭ君の方がＫ中の子の話をしてくれたことです。なんかすごくはがいかったです。Ｈ君はずっと発表してくれてなかったのは，やっぱり重かったんだと思った。『Ｋ中では同和問題学習が行われてないの？』って思いました。けど板中からＫ中に行った先生がいます。Ｓ先生やＫ先生とかです。本当にＫ中の人たちを変えていくためにがんばってるだろうなって思いました。それとは反対に，今日ＫＪ中からＹ先生が来てくれていました。Ｙ先生がいるＫＪ中では同和問題をやっているんだと思うと，うれしかったです。Ｄ中でもやっていると聞いてすごくうれしかったです。

三つ目は吉成先生にきた手紙のことです。“同和問題の作文で，国語の点数に入るから，きちっと書いとけよ”と高校の先生が言ったということを聞いた時、ムカつきました。『なにが国語の点数だ』って思いました。すごくはがいかったです。なんだそれって思いました。作文で１から１０まできめたところで，その作文の中の内容って結局深くは見られてないんだろうって思いました。手紙を出した先輩，その他の先輩方が苦しい思いをしています。そんなとこで私たちには信頼し合える仲間がいます。そこでがんばっていこうとしなければ，なんにもならないと思います。だからがんばる。

四つ目は今日何人か学習会に来てたけど，最後まで口を開かなかった子がいたのを先生は気付いていたんですか？他の子はみんな言いたいこと言ったと思うけど，一人だけ何も言わずに帰った子がいるの知ってましたか？先生が１回当てたけど言わなかったけど，先生，気付かなかったですか？Ｓ君ですよ。けど私も先生が誰かに『号令かけて』って言った時，先生の方を目で見ることしかできなかった。あの時『先生，まだＳ君が言ってない』って言えてたら言いたいことをみんなに伝えたことで楽になってただろうけど。なんかそれをまだ言えない自分がつらい。

五つ目は私が前に考えていた教師という仕事です。前といっても中１の時，私は『先生っていいなあ』って思ってました。そしてそれはなんでかっていうと勉強しなくていいし，授業教えるのだって分かってることだから，やすいだろうし，マルつけとかして道徳とかでも生徒の意見聞いたらいいだけだし，って思っていたけど，最近そんなことないと思うようになりました。今日阿部先生も言っていたことだけど，『研修会とか行っても，手を挙げて言えない』とか，山口先生がまた涙流しながら言ってくれたこと，他の先生方も森口先生も私たちに本当のことをぶつけてきてくれていること。先生方みんなが教師として

ではなく，一人の人間として私たちを支えていてくれていること，本当にうれしいです。

六つ目はＹちゃんやＳちゃんやが学習会に来ることに抵抗があったって言ったことです。それとか同和問題学習がすごく盛り上がっているのは南会場だと山口先生に言われたことです。違う会場に行くことに抵抗があるのはなんか分かるような気がします。それなら私たち南会場の子が他の会場に行けばいいのにって思いました。っていうことを先生に言おうとしたら先生もういなかったから，まいってしまった。

七つ目は小６の時にやった町同研かなにかで，【ベロ出しチョンマ】を中心に見てもらいました。感動しました。涙も出ました。部落のことでなかったし，その時私に部落っていう意識はなかったから，本音も言えました。けど一つおかしいって思うことがあります。それは担任の先生が『一番初めに誰が言うか』とか『そのあとは』とかいう順番を五人ぐらい決めていて『最後はこの子が言って，あの子がしめてよ』とか決めていたことです。担任の先生は不安だったのかもしれないし，いいかっこしたかったのかもしれない。だけど見に来てくれた大半の先生が涙を流したのは，半分うそだったのかなって，私らがついたうそだったんじゃないかなって思います。

八つ目は誰かが一人言ったら，そのたびに間があくことでした。そして最後の方になるまでみんなが言ってくれなかったことです。そして初め，一番に誰が手を挙げるかで挙げれなく，結局先生がＭちゃんを当てたことです。教室でも私はそうなんだけど，一番に手が挙げれないことです。まだ心が弱いなあと思います。

九つ目は学習会が６時１５分からってことは，当然部活を早退しなければいけません。私がみんなに『帰るから』って言った時，『どして？』って聞かれました。そこで息をのまず，『学習会行くから，バイバイ』って笑って言える部です。それがうれしい。それと私に『明日全体学習発表するの？』って聞いてきた子がいました。私は『うん』って答えました。今日の学習会もそうだけど，考えて言ったことじゃないし，書いてるもの見て言ったことでもない。言いたいこと言う，言いたくなったら自然に手が挙がってるものだと私は思います。

最後は学習会終わった後，Ｋちゃんが『全体学習発表するから，続いてよ』って言ったことです。みんなががんばろうなっていう気持ちになっていたことです。私は今ならみんなの前ではっきり言うことができます。『部落に生まれてよかった』と。

今日うれしかったこと，それは仲間が増えたこと。そしてその他にもいろんなことがたくさん得られたと思う。明日の全体学習，私は今日本音を語り合った仲間を，友達を絶対に一人にしません。私らだけががんばって差別が完璧になくなるわけではないけど，見に来てくれた人たちの心を揺れ動かすことはできるはずです。Ｔさんが言っていたけど，見せるんじゃなく見せてあげる授業にしたい。とにかくがんばります。」

※

授業の中で，本当に思っていることを言っていかなければいけない。研究授業って何だろうか，とも思います。

北島中：資料に関わっての学習プリントを作っていたが途中から切り替えた，と言われましたけど，その切り替えた時の意味はわかりましたが，資料がどのように子どもたちに生きているのか。自分だったら資料の中から言わせて子どもと一緒に勉強していくやり方しかできないと思うんです。吉成先生にとってのこの資料の意味や，資料をどのように扱っているのかということについてお聞きしたいと思います。。

吉成：自分自身にとっての部落差別をきちんと考えさせたいと思いました。。資料をかみくだいてやっていこうと考えてはいましたが，それよりもあの子たち自身の生活を見た方がもっとわかりやすいと思ったんです。そういうふうに子どもたちにも言ってきましたし，私自身の

ことについても話しました。資料から離れて家に帰って家の人と話してみようとも言いました。クラスの中の少なくとも３分の１ほどが話をしています。子どもたちの中には言おうか言うまいか揺れているのがよくわかる子もいました。その中で全員が，その話題についてシャットアウトされているんです。資料の内容も勉強する必要があると思いますが，そういう今の生徒自身の生活を授業でやった方がいいんではないかと考えたんです。まあ，ただそれで終わりというんではなく，自分の中で考えて，次に資料にもどっていく。わからなかったことが資料の中でわかり，家で話し合い，また自分で考えて，資料を読んでわかっていく，ということになると思うんです。資料だけ，生活だけ，というんではなく，両方とも使いながら，繰り返し、繰り返し学んでいくということが，本当に意味のある同和教育でないかと思います。

香川県佐藤：全校生の前での発表は，本当にすごいと思います。支えていく学級での取り組みがしっかりしているから，できるんであろうと思います。

私の学校ではかつて逃げの姿勢がありました。自分の思いを言え，というだけの教師の姿が，そこにはありました。地区の生徒が先生に悩みをぶつけていく，なんでおれらだけが，という子どもの発言を受けとめることができない。その後，部落問題について一人ひとりが一生懸命考えて取り組んでいく子どもたちを，どう支えていくか，という研究会も開きました。きちんと起こしていく，ということを運動団体の方に申し入れもしました。学校としてどう対応していくか。今まで子どもを放っておいた責任がきたんだと思います。そこで，教師がリードして自分の部落問題との関わりを語っていくと，生徒からも涙ながらの声が出てきました。そういう取り組みを始めて，ようやく５年目になります。保護者啓発としては授業後に書く生徒の作文を見せることにしています。子どもがどのように考えているかを，作文を通じて訴えています。そして今また，先進校に学びながら取り組んでいるわけです。

森口：一部の教師のひたむきながんばりが，子どもたちによろこびを与えていきます。『この先生は本物だ』っていう思いが，しんどい部分を持った子どもたちによろこびを感じさせていくと思っています。この全体学習が始まった時に『いくら一人ががんばったって，一つのクラスががんばってもだめだ』ということがありました。授業を繰り返す中で生徒たちがだんだん本当の思いを語りだしたきっかけっていうのは，最初この授業をするのにすっごく反対がありました。『なんでこんなことしなきゃいけないのか』という思い，今もあるかもしれませんが，そういう思いがありました。でもやらなければならない，という中での取り組みだったと思います。その当時の私たちの学年団の中で，同和問題に関して本当に苦しい部分を語り合えた。当時授業をしていく中で『自分を遠い遠い所に置いといて同和問題を言っている。そうじゃない，私は差別者だった』初めて部落を知った時，教師になって部落差別との出会いがあったはずなんです。小学校の時，中学校の時，高校の時。そういう思いがこういう研修会や学年の話し合いの中で出始めました。先生方が一つになってがんばろうという姿が，子どもたち一人ひとりの思いになってがんばっていけたと思うんです。

一年目「峠を越えて」という本をまとめました。まとめるのにも学年主任の先生の多くの苦労がありました。けど，一つの形になった，それを手にしたよろこび，そのよろこびがあってまたまとめようという意欲ががんばりにつながる。その当時，私は自分の一番しんどい部分を指導案に書きました。先生方を信じて，生徒たちを信じて。その時の主任さんの言葉は一生忘れません。『森口，ここまで書いてお前本気か』そして学年の先生方にも言った。『森口がここまでほんまに闘おうとしている。がんばろうとしている。我々も本当にそれに見合った性根の入った指導案を書こう。５行や４行で終わる，よそから持ってきたような指導案を書くのじゃなくって，本当の思いを出し合う指導案を書こう』と言ってくれた。『ああ，本当に一緒にがんばってくれようとしてるんだな』と思いました。そういう思いが先生

への信頼となり，先生たちとのつながりが『この先生だったら俺らがんばれる』っていう思いにしていったと思います。

去年一年間，すごく大変でした。が，膨大な記録が残りました。それは学年の先生方が自分を全部ぶつけようとしたから，自分の一番つらい部分，苦しい部分をぶつけようとしたからでした。一人の先生だけでなく，授業に取り組んだ先生方が本当につながろうとしました。今日の指導案だってそうです。誰がこんな指導案を書けるだろうか。そういうしんどい部分を本当にぶつけていけるような関係になり，つながっていけたから書けるんです。

子どもたちが持っている部落という恐れやおびえを取り除いていったし，『こんな先生や仲間とだったら一緒にがんばっていける，闘っていける』という思いにしていっていると思います。去年全体学習する時に，公開授業をするクラスで，担任の先生が書いた指導案を何回か読みました。クラスの子どもたちの目がキラキラ輝いていたのを覚えています。『ああこの先生本物だ。本当に考えてるな。この先生部落問題についてしっかりがんばってるな』という思いにしていった時に，子どもたちが本当の思いを語っていく。本当に苦しいことが言える関係，そして絶対に部落差別をなくしていくという関係が，そこには生まれていると思います。我々がしんどい部分を言い合える関係，本当につながっていける関係，そういうものを抜きにして子どもたちが『今日の授業受けてよかった』という授業にはなっていかないと思うんです。我々がつながっているっていうことは，生徒につながれっていう前に問われていることだと思うんです。今年の取り組みだってそうです。山口先生がやっぱり泣く。でもその必死の涙に部落の子どもたちが，必死でこたえようとする。そういう一人ひとりの先生方のひたむきさや精いっぱいの姿が胸をうっていく，心を豊かにしていく。榎村先生が，子どもたちががんばろうとする姿を見て『よかった』って言われる。その思いに『おれら一人でないんだ，がんばっていけるんだ』っていうつながりになっていく。我々がこの取り組みの中で我々にとってこの問題や部落問題が何であるか，そしてそれをなくしていくということがどういう関わりであるかということをしっかりとらえていく。そういう関係になっていくことが，まず我々教師集団に問われているんだと思います。

まだまだ不十分なことはいっぱいあって，この取り組みの中で，学校全体の中で，もっともっと豊かなもの，確かなもの，まだまだ明らかにされてないもの，お互いが支え合って励まし合って本当にがんばっていける，つながっていける，そして自分自身を解放していける。まだまだ重いものをひきずっている，部落というものが重たい。こだわる，恐れる，おびえる，苦しいものがある。その中から我々自身を解放していける。そういう次元に我々がなった時に，子どもたちが本当にがんばっていけると思います。

北淡中：過去１０年間で３回の差別落書き事件が起こってしまいました。部落の子への差別の文字がこれでもか，というほど書き連ねられていました。全校生徒２７６名中１３名の地区生徒。少ないが，１３名の子どもが，自分のクラスや全校生の前で絶対に許さないという訴えをし，一緒に闘ってほしいと発言しました。そういう中で森口先生との出会いがありました。森口先生の生い立ちや同和教育のよろこびを聞くことができ，力となって部落差別と闘っていけています。

今子どもたちと取り組んでいくべきことは，差別がきつい社会で，きちんと自分の立場を明らかにして生きていくことだと思っています。そして今は，自分の親の生きざまを聞いてくることに取り組んでいます。

「僕の父は昭和２８年北淡町の△△に生まれた。父は小さい時から自分は部落に住んでいることを何となく感じていたらしい。子供の時，父の両親が近所の人に『お願いだから部落に住んでいることを言わないでほしい』と言っていたのを聞いて知ったそうだ。しかし，部落のことを全く知らなかった。父はそんなことがあってから十数年たって好きな人

ができた。そしてその女性は，部落の人間だったそうだ。その時の父は自分が部落には住んでないと思っていた。そのため『部落の人だからな。だめだな』と思ってその女性と別れたそうだ。女性と別れて数年たって，ついに両親からはっきりと『わしらは部落に住んでいるのだ』ということを伝えられた。父はかなりショックだったそうだ。

父は就職先を島外に決めた。それは島内で働いている時，職場の人が『お前どこに住んでるんだ』と聞いてきた。父は『○○』と答えると『○○のどこだ』と深く聞いてきたので，島内で働くのは諦めた。父は島外なら『○○のどこだ』とまで深く聞いてくる人がいないだろうと思った。父は就職先を決め，紙に現住所を書いた時，『・・・北淡町○○』というところまで書いた時に悩んだ。『△△と書こうか，書くまいか』と。結局，そこには『□□□』と書いた。島外の人が△△を知っているはずがないのに‥‥。

そして働いて月日がたった。すると，職場でおかしなことが父の周辺で起こっていた。それは裏の方で父のことを『あいつ部落らしいな』という噂や，４本指を立てながら『あいつこうなんじゃないか』という噂がたった。短い間だったが父に不安と苦悩の日々が続いたそうだ。そして最近父の口癖になっているのは，差別などの話を家族でしていて最後に出る『まあ差別に負けないことだ』という一言が，僕たち姉弟に対する望みだと思う。

父の話を母に聞いている時に，好きな人ができた父の気持ちが『部落の人だからだめだな』ということについて，非常に残念に思った。世の中には，いやもっと範囲をもっとせばめて北淡町の人の中に『部落の人だからだめだな』と思っている人が少なければいいがなあ，と思った。そして部落に住んでいることを恥ずかしく思わないで，自分の支えにできるようになれれば，と思う。そして父の一言に全力で応えたい。」

こういう作文を書いてはいますが，まだ１年生はクラスで自分の立場を言えていません。保護者の方にも協力をお願いしたりしていますが，最後にはきちんとものが言える子どもにしていきたいと，そう思っています。

愛媛朝倉中：『部落はどこにある』『自分の心の中にある』というのがでました。自分もおなじように答えられたと思いますが，本で読んだ知識だけのものであったと思います。彼は自分が差別と闘い，生活の中からのいろんな思いから言えたんだと思います。部落差別が自分の生活となかなか結びつかない生徒が多いですが，全体学習は自分自身を見つめるいい機会になっているように思います。板野中学校のみなさんの思いを，帰って伝えたいと思います。

川内中新居：自分自身まだ高まってはいませんが，授業を見て大変勉強になりました。森口先生の一言一言のもとは何なのか考えさせられました。何があの子どもたちにああ思わせるのか，人間として，親としてあるべき姿，確かなものをつかむ，ということをよく考えて生活していきたいと思います。先生方の熱い思いが少しでも社会の中で実践できていくことを強く願います。

坂野中岡崎：授業に参加させてもらって元気が出てきました。板中だからできる，っていうことをよく聞きますが，板中でできていることを坂野でもできる，と確信して帰りたいと思います。

川内中：森口先生と出会って自分の同和教育観が変わり，いろいろ勉強できました。『お前が本物なら，それが生徒には伝わる』と言われました。研究授業で意見がたくさんでた時に，良かった，ばかりで終わるが，それだけではないと思うんです。今日の授業を見て自分自身が真剣にできていたか，研究授業や訪問というと授業はしたが，その後も計画的にできたか，と考えると恥ずかしい。まだまだ生徒の意見も少ないし，深まりもあまりないが，本当にがんばっていきたいと思います。

板西幼西川：生徒一人ひとりが自分の思いを精いっぱい言っていました。それを周りの先生方が支えていらっしゃいます。「教育は人なり」といいますが，同和教育こそ人なりだと思わせ

られました。

吉成：今日来ていただいて，本当にありがたく思います。父ちゃん，本当に一緒に考えてほしい。真剣に考えてほしい。

助言者：今日が私の本当の『意識の芽生え』だと感じました。第１回の全体学習にも参加させてもらい，その時の資料「母の願い」を，いつもカバンに入れて歩いております。

「私自身が部落出身ですと言えるようになったのはほんの数カ月前です。‥‥私の心の中に部落は悲惨であり，貧しく，そこに住む私たちは賤しいものという意識が，知らず知らずのうちに入り込んでいたのです。だから，自分自身が顔を上げることができなかったのです。」という一節があります。この文を読んだ時，胸をえぐられた思いがいたしました。本当に正面から向き合ってやっているか。教師がこういう状態を作ってはいないか。まさしくこのお母さんの訴え通りだと思いました。教師の責任で子どもたちを苦しめていたんだ。もう一度一から出直したい，とそう思いました。「意識の芽生え」丸岡さんは隠すことから名乗ることへと変わりました。そして私たちは，板中の生徒や先生方と出会い，新しい自分を作っていこうとしております。新しい自分とは，部落差別と正面から向き合って，部落差別を解決していこうとしていく生き方だと考えます。子どもというのは本当にすばらしいですね。一つの生命が誕生する時，ものすごい喜びを感じます。しかしこのすばらしい生命を，我々が汚しております。部落の子どもたちには部落差別で苦しめ，部落外の子どもたちには，自分が部落差別をしているかもしれないという可能性で苦しめております。

学校教育の中核に同和教育を位置づける，という同和教育基本方針が出されましたが，人である私自身が同和教育を自分自身の中心に，中核に置いて，差別を受ける立場，差別をする可能性を十分秘めている立場の子どもたち両方をどうしていくか，ということを問い続けていくのが，私たちの使命だと思っております。

『同和教育をするよろこび，同和の授業をするのがうれしくてうれしくてたまらない』と森口先生がよく言われます。同和教育がとことんわかっているから，自然とその言葉が出てくるんだと思います。考えていかなければいけないのは，一人の人間が生命を体内に宿した時から同和教育と向き合っているということですね。それは被差別の立場，差別者の立場両方あると思います。しかし，小学校で，幼稚園や保育所で，このような取り組みがされていけば，もっともっとすばらしいものになると思っております。

永井議長：町内外からはもとより，県外からもたくさんの方がおいでているのを見て，こんなに喜ばしいことはないと感じております。全体学習，以前から望んでいた学習であります。学校の教師が，部落差別をはじめとする差別をなくすために真剣に取り組んでも，家庭でつぶされております。今日の生徒たちの発言，自分の親を売り，さらしものにしたわけですが，これらの生徒たちは今後も家庭で闘っていかなければなりません。こういう生徒たちをつぶさないための今後の取り組みが必要になってくるわけです。

あらゆる研究大会に参加いたしましたが，見せかけの授業ばかりです。あわてて研究して，見せる授業ばかりしている。生徒は同和教育を受けながら差別者になっている。学校教育の中にこそ，差別者になっていくものがあるのです。与えられた資料や教科書に基づいてなされる密室教育，それではいいかげんな教育になりかねないんですね。身近な差別問題について，子どもたちにどれだけ事実を伝えても，思いを伝えなければ何にもならない。子どもが自分の問題としてとらえるためには，教師の本当の思いを伝えていくことなんですよ。解放教育，人間教育とは，自分の思ったことを堂々と述べられる子どもをつくっていくことなんですよ。心の中の思いを全体学習のような場で語り，大勢の中で学んでいく大切さ，そういうものが同和教育の中核であるわけです。このような「和」を多くの場で広げていってほしいと，切に願います。